

別冊・あなご



36号

2019.12



セキさんはネ ホントに
背の高いカライツとすた人でナ
見れば顔又な

いつもニコニコでナ
いや味言われでも
その場でおさめでナ

えっつも ごんご
ほうほうと燃やすて

眼めちめちやとすてる人たつたといモ

煙りはりてなく

息子征^だして

息子に戦^た死^なれて

泣いてるんじゃないかい

子といも

そう 思^った^った

へ小原昭^三さん^と談^話



「牛や犬の死んだようにしたくねえと思って、ながい間に
少しづつためた金で墓石つくってやったす。オレ死ねば、
戦死した千三を思い出してくれる人もなく、忘れ去られで
しまうべと思って、人通りの多い道のそばさ建でだす」
と、七十三歳になる母親の高橋セキさんは言うのだった。

〈小原徳志著『石ころに語る母たち』未来社刊より〉

別冊・おなご 36 ・ 目次

セキさん

1

詩『甘露』

渡邊眞吾

4

「新自由主義はチリで生まれ、チリで死ぬ」——南米チリ・反政府デモの背景——

柳原恵

7

歌集『小さな抵抗——殺戮を拒んだ日本兵』渡部良三著（岩波現代文庫）を読む——

佐藤恵美

11

母の手紙——第二次世界大戦と父母の激動の歴史——

宮崎順子

26

ヘレナ・ドウニチ・ニヴィンスカさんを偲んで

田村和子

31

千三忌と豊彦さん

渡部恵子

36

出会い

朝倉恵子

38

停止しない思考『わらしべ農園』便り

千葉ちた江

39

イギリス・西ドイツでの感動・ふれあい	〜岩手県婦人海外研修に参加して〜	渡邊満子	48
市民劇『がんとり』を観て		兒玉智江	53
父と母にも青春時代があった	―母の章―	佐藤弘子	56
今、里山で暮らす		相川元美	63
母のカレー		高橋つか子	68
紡ぐには		高橋哲子	71
ハル子さんのこと		小平玲子	79
Learning Ikebana (生け花を学ぶ)		ダガン スーザン	85
あとがき			96

越後真吾

表紙・カット 小原麗子

甘露

渡邊真吾

母が生前

笑いながら話していた

お前が三つの時

ぶどうの木をゆらし

落ちてくる青虫を

ひろって食べていたケ

記憶にはないが

不思議な触感と

苦かった味がよみがえる

父がつぎ木して

苗を作ったぶどうの木

芽が出た頃に中国戦線に出征した

母と私たち兄弟が

棚を作り、せん定をし

ボルドー液で消毒し

大事に育てたぶどうの木

毎年 樹皮をはがし

害虫から木を守る仕事は辛かった

戦中 戦後

甘いものなかった時代

秋になって空が高くなる

棚から房が垂れさがる

チリで生まれ、

反政府デモの背景

各都市で抗議活動が行われた。ピネラ大統領は国内の主要都市において国家非常事態宣言と夜間外出禁止令を発令した。

10月末に行われた反政府デモには、なんと100万人以上が参加した。チリ史上最大規模の抗議活動に抗議する人々であふれ、政府の思いのたけを記して掲げられたチリの国旗や、先住民マプーデモ兼化の影響により、大規模なデモ活動が頻りに行われていた。国連気候変動枠組条約締結国会議（COP25）とアジア太平洋経済協力会議（APEC）という主要国際会議の開催の断念を発表した。

新自由主義がもたらした格差社会が

デモの背景に

大規模な抗議の結果として、地下鉄会社は運賃値上げを早々に撤回したが、11月1日現在でも、反政府抗議活動は鎮静化していない。なぜならば、人々が求めてくるのは、地下鉄運賃値上げの撤回ではなく、この数十年チリ社会をむしばんでいる新自由主義の

つまんでみては

甘くなれ 早く甘くなれと願った

赤トンボが群れて飛んでいた

食べあきて晩秋になると

枯葉の間から 顔を出す

黒ぶどうは ブラッドストーン

白ぶどうは トパーズ

醗酵していて大人の味がした

父 三十三回忌 母二十七回忌

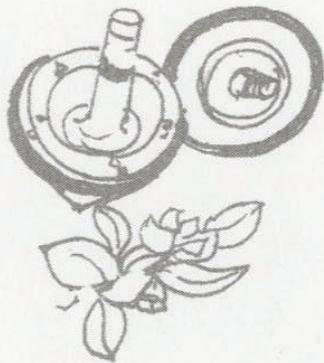
私は両親の行年を超えた

近づけば遠くなり 遠くなれば近づく

双曲線のような日々 今は

甘露となって天空から降ってくる

渡邊真吾



「新自由主義はチリで生まれ、チリで死ぬ」

—南米チリ・反政府デモの背景

柳原 恵

地下鉄運賃の値上げが火をつけた怒り

はじまりは、日本円にしてわずか約4円の地下鉄運賃の値上げだった。これがチリ民主化以降最大規模の反政府抗議行動に火をつけることになる。

10月初め、チリの首都サンティアゴの地下鉄会社は燃料価格の高騰などを理由として運賃の値上げを発表した。それに対して、反対する高校生たちが地下鉄の駅を占拠するデモを行った。それが引き金になって爆発したのは、数十年に渡って積もり積もった人々の怒りだった。首都サンティアゴをはじめとして、全国

各都市で抗議活動が行われた。ピネラ大統領は国内の主要都市において国家非常事態宣言と夜間外出禁止令を発令した。

10月末に行われた反政府デモには、なんと100万人以上が参加した。チリ史上最大の規模だ。街は政府に抗議する人々であふれ、政権へ抗議を可視化した。思いのたけを記して掲げられたプラカードとともに、チリの国旗や、先住民マップーチェの民族旗が翻る。

デモ激化の影響により、大統領は、チリで予定されていた国連気候変動枠組み条約締約国会議（COP25）とアジア太平洋経済協力会議（APEC）という主要国際会議の開催の断念を発表した。

新自由主義がもたらした格差社会がデモの背景に

大規模な抗議の結果として、地下鉄会社は運賃値上げを早々に撤回したが、11月1日現在でも、反政府抗議活動は鎮静化していない。なぜならば、人々が真に求めているのは、地下鉄運賃値上げの撤回ではなく、この数十年チリ社会をむしばんでいる格差の是正な

のだから。

1970年、チリでは世界初の自由選挙によるアジエンデ社会主義政権が発足する。それを脅威と見なしたアメリカの支援を受け、1973年、ピノチェト将軍率いる軍部がクーデターを起こし、アジエンデ政権を転覆させる。ピノチェトは大統領に就任し、軍事独裁政権が始まった。軍事独裁政権下では、アメリカのシカゴ学派の経済学者らが財務顧問として招かれ、徹底した新自由経済政策がとられた。新自由主義とは、国家による福祉・公共サービスを縮小・民営化し、規制緩和による市場の自由競争を重視する経済思想である。チリが「新自由主義の実験場」と言われるゆえんだ。チリは経済的に発展し、「チリの奇跡」とも呼ばれる発展を遂げた。

冷戦構造の集結を背景に、アメリカの影響力が弱まった軍事政権への抗議活動は活性化し、1990年、民主的な選挙によって独裁政権は終結する。

民主化以降も、新自由主義の経済政策は基本的に継承された。経済的発展は継続し、「南米の優等生」として、「先進国クラブ」経済協力開発機構(OECD)

に南米で初めて加盟した。

しかし、新自由主義下の経済発展は、国民の間の格差の拡大と高い失業率という結果も伴っていた。富める者は富み、貧しい者はますます貧しくなっていたのだ。

現在の大統領は何社もの大企業の株主であり、フォーブス誌の世界富豪ランキングにも名を連ねる大富豪でもある。

新自由主義の政策によって、チリではあらゆる事業が民営化されている(一般的に、英語の「プライベートイゼーション」の訳として当てられる「民営化」という日本語は正確ではない。「私企業化」あるいは「私有化」である)。水道、電気といったインフラ、年金、医療保険などの社会保障、教育……。

OECDの大学教育費ランキングの1位はアメリカだが、2位を争っているのが日本とチリだ。私が2019年3月まで住んでいたサンティアゴのラスコンデス区は高所得者層が住んでいる地区だが(現大統領もここに住んでいる)、チリは公教育のレベルが低いため、親たちは、子どもたちを教育環境のいい私立

学校の付属幼稚園に入れるために必死だった。

裕福な層にとつては、お金を出しさえすれば先進国と変わらないサービスを受けられる。公的サービスも一部残されているが、不十分なもので質も悪く、当然、貧しい人々にとつては基本的な生活自体が苦しくなる。年金額が不十分であるため、高齢になっても働かなくては行けない人々が多いとも報道されていた。

チリは生活費が高く、サンティアゴの物価は東京と変わらないか、物によつてはむしろ高いくらいに思えた。一方で、新自由主義的経済政策の影響によつて、不安定な非正規雇用が増えて、とくに若者や女性にとつては安定した職に着くことが難しい。職場から交通費が支払われない人々にとつて、数円の値上げは無視できない金額である。なにしろチリは世界的に見ても公共交通機関の運賃が高い国で、収入の3割が仕事に行くための交通費に消える家庭もあるのだ。

そういった積もりつもった人々の不満は爆発寸前だった。そこに火をつけたのが地下鉄運賃値上げであり、高校生のデモだったのだ。それらは引き金にすぎなかった。

デモ鎮圧のために軍が出動

多くのデモは平和的に行われているが、一部では放火や略奪が発生し、デモ参加者と治安部隊の衝突も散発している。一連の衝突でこれまでに20人が死亡し、逮捕者は7千人を超えている。暴徒化した参加者を鎮圧するという名目で軍隊、警察軍も出動した。

戒厳令と夜間外出禁止令が敷かれる中、私がこの間まで住んでいた付近の大通りには戦車が走り、よく買い物をしたスーパーマーケットの屋根には軍のスナイパーが銃を構えている。ツイッターなどのインターネットのSNS（ソーシャルネットワークサービス）では、地下鉄の駅で軍によるデモ参加者への暴行、拷問が行われているとの告発もなされていた。こうした光景は軍事政権期の市民を対象にした悲惨な弾圧を人々に想起させた。

平時からの格差は犯罪に手を染める人々を生み、そのような犯罪者にとつては格好の“稼ぎ時”になる。知人のチリ人男性は、警察や警備員も手が回らないので、地区で自警団を結成して見回りをし、コミュニテ

イを守っていると言っていた。チリは南米一平和な国と言われ、治安も良い。そんな社会が一変したような、非現実的な光景だ。

チリは日本の将来像

今回の大規模な反政府デモは、ここ数十年に渡る新自由主義が引き起こした社会の歪みが決壊したものだ。

日本も80年代以降、新自由主義的経済政策を推し進め、現政権はそれをますます加速させている。インフラや社会保障、公共事業の民営化（私企業化、私有化）を進める一方、賃金も増えず、非正規労働者は激増している。近い将来、日本もチリのようにすべてが民営化されるかもしれない。

チリの人々は、こんな社会はもうたくさんだ！と抗議した。では日本はどうだろうか？社会保障費の減額にも増税に対しても従順で、「イートイン脱税」を市民同士で見張り合うような奴隷根性がまん延している。チリ在住の日本人から聞こえるのは、公園で抗議

デモを行う高級住宅街の住民に対して、あいつらは金持ちなのに、何で抗議なんかしているんだと見当はずれの文句だ。格差社会に住む当事者が、格差社会に抗議することの何がおかしいと思うのだろうか。あるいはノブレス・オブリージュの精神が日本人には理解されていないということだろうか。

新自由主義はチリで生まれ、チリで死ぬ。

サンティアゴの街角で、ある女性が掲げていたプラカードにあったフレーズだ。では日本では？それは私たち市民の闘いにかかっている。



歌集「小さな抵抗」

殺戮を拒んだ日本兵

渡部良三著（岩波現代文庫）を読む

佐藤 惠美

私はこの歌集を読んで身震いするほどの衝撃を受けました。

著者の渡部良三は一九四四年春、中央大学在学中に学徒出陣で陸軍二等兵として中国河北省の駐屯地に配属されます。現地の駐屯地で新兵訓練の一つとして、中国兵捕虜を杭に縛りつけたまま、新兵四十八人に「度胸を付けさせるため」として、中国共産党第八路軍の捕虜五人を銃剣を使って殺させた。「度胸を付けさせるため」との理由だった。

仲間の新兵が次々と刺突銃を手にして捕虜を突き刺した。渡部の順番が回ってくるまで、彼は色々と逡巡するが、その場になって、出征間際に父親が言った言葉を思い出します。父親は内村鑑三の主催する無教会派の牧師でした。

彼の番が回ってくる。彼は神のみ言葉の告知「虐殺を拒め」のまえに、手渡された刺突銃を握りしめて、そばに立つ指導教官にはっきりと「信仰告白」をする。

「おい、渡部、おまえは信仰のためにパロ（八路军の捕虜）を殺さないというのか！」

「はいそうであります」途方もない大声が四方に響き渡った。

以後、人知で考えられるほとんどの私刑（リンチ）は、死を除いて経験することとなる。

彼の軍隊生活はこのようにして始まり、そのことごとくを、メモする代わりに短歌に託した。

この歌集には九二四首の短歌が載せられている。その一句一句には、そのまま大日本帝国陸軍の現実のおぞましい姿が詠われており、読むほどに胸の潰れる思いをいたく感じた。

以下の文章は、この歌集の作者渡部良三が、戦後青山学院大学において開催された草の根平和講演会での講演記録「克服できないでいる戦争体験」を付録として収録した一部を引用したものです。

(前略)

一九四四年春、私は学徒兵として、大中華民国河北省深県東魏家橋鎮（現在の中華人民共和国）という小さな邑に派遣され、駐屯部隊の一兵として教育訓練の日々を送った時である。鉛色の空が時に雲を薄くして日が射すかと思わせるような、すつきりしない日和の朝食の刻であった。内務班と呼ばれる兵等の居室で、折畳み式の細長い座卓を並べ、一五名の兵に担当分隊長一人、分隊付上等兵一人計一七名が朝食を摂っていた。いただきますという兵等の声が響いて幾許かの時間が経った時である。ばん！と食卓を叩きつけるような音とともに班付が立ち上がった。兵等は驚き一斉に班付の顔に視線を当てた。兵営内は朝食時間の静寂を刻んでいた。班付が口を開いた。

「飯を食いながらでよいから聞け。分隊長殿に代つ

て伝達する。今日は教官殿のご配慮によりパロ（八路）中国共産党第八路軍の略。現在の人民解放軍の前身）の捕虜を殺させてやる。演習で刺突してきた藁人形とは訳が違うから、教官殿の訓示をよく聞き、おたおたしないで刺し殺せ！おどおどして分隊長に恥をかかせたりしないようにな。いいか・・・」

箸音は止み、兵等の心音さえ聞こえるのではないかと思われる緊張と静けさが満ちてきた。飯を食いながらでよいと言われても、もし箸を手に口を動かして居たなら、食卓を足蹴にされるのがオチだ。捕虜を殺して肝玉を持って・・・か？彼は転属以来一度ならず人伝に聞いてはいたが、その殺人演習が、今日現実のものとなるうとは思ってもいなかった。身を貫く驚愕は食物の嚙下を不可能にした。そしていつ班付の話が終わったのか、話を聞いていたのに、気付いていないという状態でした。勿論当日の昼食も殆ど摂れなかった。戦友等の食欲を横目に見乍ら自分という人間を顧みる自らがそこに在った。（中略）

私は兵として戦地において自分に対するリンチを除けば、忘れることのできない三つの経験をしており

ます。一つはこれから述べようとしている捕虜の虐殺、二つは女密偵の拷問、三つは激戦とその前後の殲滅作戦（焦土作戦）と老幼男女を問わぬ無差別掃討行動です。掃討と言えれば聞こえはよいが皆殺しです。（中略）

昼食はのどを通らぬまんま午後一時の集合ラッパを聞き、初年兵の教育小隊は営庭に集合した。いつもは時間前に営庭に立ち新兵らの集合整列を待っている教官の姿がない。代りに自分が所属する第四分隊長鷺津軍曹が立っていた。引率されて営門をくぐり、兵営と対角線上にある空地について見ると、軍刀の佩環（はいかん）の音を響かせながら、ゆっくりともとおる（歩き回る）姿がそこにあった。教官である。そこは、今朝、戦友等と共に大きい素掘りの穴を掘ったところだ。彼は一瞬これが墓穴かと直感した。型通り小隊全員の点呼が改められ、教官に、異常なしの報告がなされ、空に吸われて消えた。

驚愕と戸惑いと共に、どうにかならないかという漠然たる想念の堂々めぐりの中で、最も重要な位置を占めていたのは、この殺人演習を拒否すべきかであった。小さい頃から、自分の生命も他人のそれと同等に置け

ない人間は、神の教えに背く者だと躰けられてきたことに思いを致せば、当然、聖書の“汝殺す勿れ”をあげる迄もなく、答えは拒否の一事しかないのに、自分がどうしたらよいのかなどと考える事自体異状であった

故郷を後にする時、山形市の小さな旅館で、何時間かを過したあの日、父から与えられた言葉「官吏の中には、外交官という職があるだろう。私は詳細を知らないが、国際紛争を最小限に、ましての事戦争については、限りなくゼロに近付けるべく努めるのが、外交官だと私なりに解釈している。お前はこれから戦争に征くが、私の知る限り日本の軍隊はお前のその冷めた眼を容れる事はないだろう。多分生きの限りを一兵士として留めるだろう。今別れて戦地に行つてしまえば、父親として何もしてやれない。一言の助言もできない。それが切ない。しかし良三、どうか神に向かつて目を開いてくれ。たとえ外交官でなくとも一介の兵士として戦地に在つてできる事があるだろう。私には戦地の経験がないから、それはこれだと指し示す事はできない。しかし兵士という人間として、神様のみ心に

叶う行動をする余地が必ずある筈だ。それを知る為にも、常に胸を開き神様に祈る事を忘れないでくれ。いかなる事態に遭遇しても神がいまし、良三を守り導いてくれる事を信じてくれ。神様を忘れないでくれ」と言い、更に語を次いだ。「最近内村鑑三先生の聖書の研究を読んでいたら、”事に当たり自分が判断に苦しむ事になったら、自分の心を粉飾するな、一切の虚飾を排して唯只管に祈れ。神は必ず天からみ声を聞かせてくれる。”と。だから心を粉飾することなく祈りによつて神様のみ声を聞くべく努めなさい。お前の言葉でよいのだ。言葉など拙くてもよい」

私はその通りだと分つていながらどうにも心の整理ができなかった。反体制の立場に立つのが怖かったのだと思う。私は殺人をしなければならぬという現実を前に、全くどうしてよいか分らないという情況にいた。今ここに親爺がいたらなんらかの助言が得られるのに・・・、そんな気持ちで父の言葉や内村鑑三の言葉を想起していた。二二歳にもなつてと笑われるかもしれませんが、私の実相でした。このような想念の堂々めぐりのうちに、教官の訓示が始まった。

「今日はお前達が度胸を付ける為に、先輩戦友達が討伐作戦に出動して捕虜にしてきた八路（パロ）を殺させてやる。シナに来て月余、大分兵隊らしくなってきたが、未だまだである。度胸に欠ける。パロを昨日までの突撃訓練で突き刺してきた藁人形代りに殺させてやる。天皇陛下は何事も選ばずに兵（つわもの）だったことを嘉せられるのだ。よいかしつかり突撃して根性をつける。一日も早く天皇陛下のお役に立つ兵隊になれ。最初はわしがやってみせるからよく見ておれ。人間の体はな、正面から真直ぐ胸を突いたのでは、肋骨に当たつて心臓を刺すことができない。少し下端から突き上げる様に突刺しろ」と言った。そして我々が今朝の使役で掘らされた穴からほぼ一五歩程の所に、半円を描く形で、四個分隊が各々一列縦隊に整列した。殺人！捕虜を殺す！・・・。国際法をみても捕虜に関する条約をみても、強制労働さえ許されていないのに、その生命を藁人形代りに奪うという。（中略）

こうした情況の中で教官の話聞いていたのですが、いついかなる形で話が終わったのか、記憶としては何も残らなかつた。しかし猛々しい教官の声が途切

れたことだけは分った。新兵達がざわめきを起し、つい先刻自分達が後にした營門の方向に視線を移していた。つられて見ると、やせ形の体格で色白面長の捕虜が目隠しをされ捕縄を後ろ手にかけて、古年次兵二人に両側から挟まれる様にして連れて来られるのが目に入った。

いかなる理にことよせて演習に罪明からぬ捕虜殺すとや

刺し殺す数など案ずるな言葉みじかし「ましぐらに突け」

眼間（まなかい）に來た捕虜を見ると未だ十五、六歳の、誠に可愛いと言つてよい面立ちの子供に見えた。
（中略）

連行された少年は現場の雰囲気から殺されると直感したのでしよう。いきなり大声を上げた。中国語を全く知らないわたしだったが、その絶叫は、「助けてくれ！」と叫んだのだと思つています。しかしその時、古年次兵は既に捕虜の片腕を杭に縛り付けていたか

ら、絶叫と共に走り出そうとしたのだが遅かった。鈍い土の崩壊音と共に捕虜の体は、片手吊りの状態で穴の中に落ちていった。体が半回転し振れているのに、古年次兵はそのまま強引に引き上げたからたまりません。片腕に体重をかけた状態では、骨折か脱臼をしたのでしよう。内にこもったような音がした。改めて残る片手を固定した。その時捕虜を運行してきた古年次兵の一人が怒鳴りつけた。

「この馬鹿野郎！ じたばたしたって始まんないじゃないか」。日本人はこの「ばかやろう」という言葉をよく使います。この一語が、この時程人間の悲しみに満ちた言葉として聞こえたことはありません。先に単身現場にきていた教官が、どこからでも狙撃される危険な場所で、唯一人落ち着かない心情を体中から溢れさせていたのも、彼が今日の殺人演習を自ら計画し決定したのに、やはり人を殺す事に何がしかの心痛みを覚えていたが故と推察できたし、命乞いを絶叫した若い八路軍の兵士を骨折も脱臼もかまわず引きずり上げ杭に縛りつけた古年次兵が、ばかやろう云々と怒鳴りつけたのも、心の伏線は同じものだったので

ないか。

この「馬鹿野郎！」には、抵抗のすべさえもない状態にしておいて、人間を殺すことに對する、人間の持つ本能的な善なるものの悲しみと痛みとやり切れなさが籠められていたのではないか。三年も五年も戦地に生き、心の荒んでしまった古年次兵であつても、その片隅心になにがしかの「らしさ」が残つていたのではないか？今尚その想いを払拭しきれないでおります。そして心痛む現実に直面しても、良心に従い自己主張する事が許されない「日本の軍隊は切ない」と、自分に言い聞かせる為の怒鳴り言葉「馬鹿野郎！」だつたと、自れを納得させようとしている私がそこに在つた。私はこの一言を、五人の捕虜が虐殺される間に、何回か聞いた。五人の八路を、新兵四九名教官一名計五〇名の内私は拒否し、劍を振るわなかつたから、一人の八路兵士を九ないし十名で刺突した事になる。新兵の中には勇氣あり氣に、それとも教官に阿るつもりか、氣合諸共二度三度と突き刺し「立派だ、それでこそ天皇陛下の兵隊だ」と教官から誉め言を受けた新兵が何人もいる。彼等は後に第一選抜で昇進してい

つた。

殺人の訓示に続く教官の言葉は、誰に言うともなく「刺突銃をくれ！」であつた。この刺突銃と呼ばれる銃と劍は、在支日本軍のどの部隊にもあつたと聞いている。一九〇五（明治三十八）年に制定された所から「三十八式小銃」と呼ばれ、単発である。長年に照星が狂い、如何に調整しても弾丸が命中しなくなつたものを、殺人専用にしてあるものである。血を吸い銃劍は鏑、後刻に、私の手にわたされた時は、人間の血と膏で鏑の周囲は泥田のへどろが付着したか見え、光の反射もない薄黒色であつた。刺突銃とは虐殺専用の銃と劍です。

情容赦なく時間は流れていった。教官は私の所属する第四分隊長鷺津軍曹に對して「すまんが鷺津、号令をそえてくれんか」と言つた。了解の一言に続き、喘鳴のような声で「伏せ！突撃用意！突撃！」の三語が流れた。教官は型通り身をこなしたらしい。らしいと言ふのは、私は耐え切れず臉を閉じてしまつたのです。

「刺突銃を呉れ！」猛き声あり教官の手のいださるるを見つつすべなし

ひと突きしゆるゆるきびすかえしつつ笑まえる将の血に色ありや

教官が上げた気合い、それは獣の叫びとも唸りとも何とも名状し難い声、いや音であったというべきか。私が目を閉じている事に気付いた班付、蔦正男上等兵は、「この馬鹿野郎！目を開けてよく見ておけ！」と、鼓膜が裂けるかと思う程の大音声を、私の耳元で上げた。私は正面を見た。捕虜は教官の第一撃で、深々と胸を刺されたのであろう。両足を束ねられている、どうにもなりません。しかし呻き声ひとつ洩らさず、両脚を胸につくほど深く深く折り曲げ、痛みを耐えている。全くの沈黙である。この現実！・・・我々は強いられて、一部の者は、もの習い半ばで戦地に連れて来られ、今まさに、民族こそ違え同世代に対し、殺人を強制されようとしている。この殺された若い八路軍の兵士は、何に夢を託し青春を賭け、生命をかけて死を強いる暴力に対して沈黙を守るのか。大きい底知れぬ

恐怖を伴った驚きであった。

深ぶかと胸に刺されし剣の痛み八路うめかず身を屈

(ま) げて耐ゆ

教官から最初に刺突銃を手渡され、初年兵の先手を担う事になったのは、第一分隊の今野二等兵で、後日経験する激戦で運命的にも初年兵の戦死第一号となる戦友であった。心の優しい男であった。彼が教官から刺突銃を手渡され「どうだ、よくわかったか」と言われた。目を開けていると怒鳴りつけられた私はその教官に目を当てていた。捕虜を猛獣の吠え声のような気合いと共に一撃した教官は、新兵の小隊が並び立つ方向に踵を返しながらその顔はにやにやと薄ら笑いを浮かべていた。人を殺して笑っていられる！手にする銃剣からはぼつりぼつりと血が滴(しずく)している。この人間を育てた家庭はどんな精神的風土を持っているのであろうか？私は、心情レベルでは到底赦せない、そして背筋の凝る思いをかこっていた。刺突銃を手にした新兵今野二等兵は、突撃と号令されて走り

出したが、その後ろ姿はまるで老いのよたよた走りそのままであった。気合いも掠れていて声にならない。突き出した銃剣はごつつつという鈍い音と共に肋骨で止まった。失敗したのだ。教官の罵声が飛んだ。「この馬鹿野郎、両手足を縛ってある。少しも抵抗はせん！おたおたするな。やり直し！」今野は、はいと言ったらしかったが声にならなかつた。突き直しの一閃は腹部を突いたのであろう。今度はのめり込みそうになりながら漸く踏みとどまった。再び教官の狂気じみた焦慮の声が響いた。「しっかりと踏ん張るんだ。人間の体はな、刺されると急激に収縮するから剣が引きにくくなると言っただろう！」こうして最初の捕虜は教官と一〇人の初年兵に刺突され檻樓（らんる）のようになつて、まるで屠殺場の臓物もかくやと思われれる体で、足蹴され、塚穴に消えた。（中略）

引き続き二人目の捕虜が刑場に連れて来られた。三〇歳半ばかり四〇代に見えた。この捕虜は目隠しをしていない。にこやかな微笑さえ浮かべている。それを見た教官は「おいどうしたんや、何故目隠しをせん」と聞いた。連行した古年次兵の声が、直ぐ返された。「こ

いつが言うには、どうせ殺されるなら殺される場所と自分を殺す奴をみて死にたいから目隠しはしないでくれと言つてどうしても目隠しをさせないんですよ」私の夢に今も尚立つ一人はこの捕虜の面立ちです。にこやかな微笑、澄み徹った目は臉から消えません。

さわやかに目かくし拒む八路あり死に処（ど）も殺す人もみむとや

憎しみもいかりも見せず穏やかに生命も乞わず八路に死なむとす

彼も終には両手を杭に縛られ目隠しをされたが、縛られながら最初に殺された同胞の、ぼろのようになつて塚穴に転がされている姿と私共日本軍新兵の顔を、交互に見つめ記憶に留めるかのように、ゆっくりと首をめぐらせていた。そしてまた日本軍新兵の銃剣が振るわれ、捕虜は檻樓とした屍となつて塚穴に消えた。三人目の捕虜が殺される事になつた。わたしの記憶はこの三人目の捕虜についても強烈に残っている。年は二〇歳前後、我々と同世代と思われる若者だった。刑

台となつてゐる杭に体を固定された時でした。東魏家橋鎮を貫く道路に、点々と並び立ち日本軍の殺人演習を遠望していた列から、一人よろよると走り寄つて来る者がいた。その走り方からすぐに女性だと分つた。いまにも転びそうな姿からうかがえるのは、いま殺されようとしてゐる捕虜の助命を乞う為に、必死に走つてくると見てとれた。もし捕虜を助けてやれないものならば、現場に到着する前に阻止すればよいものを、教官以下の言動はなかつた。日本軍將兵のたむろしてゐる傍迄来ると、彼女はいきなり土下座をして何かを喚ぶように語り出した。私に中国語はわからないが、その女性の年齢から見て子供を助けてくれと言つてゐる母のものと認（み）てとれた。すると大阪府出身の班付、岸田上等兵が「このばばあ、今頃そんな事言つたつてどうしようもねえよ。あほ！・・・」と言つたと、その母親らしい人を捕らえ、口に猿轡をかませ道路まで引張つて行き両脚を束ねごみ袋でも放り出すように転がした。その時班付が何を言つたのか殺人を遠望していた中国人は一斉に場外に向かつて逃げ出した。一方母親の声が猿轡で消された時、既に杭に縛

られていた捕虜は、甲高い声で一言「メイフアーズー！」と叫んだ。私が一番最初に覺えた中国語で「仕方がない」の意である。十人もの若い日本軍兵士の刺突を受ければ、殺される者の体には血の一滴さえ残つてゐる筈がない。縛られてゐる手首は勿論顔も黄褐色となつており鳥肌になつてゐる。その体を尚も刺突する凄惨さは正視に耐えるものではなかつた。それでも刺突せよという教官の命令は続いた。次、つぎ、次と・・・。

纏足の女は捕虜のいのち乞えり母ごなるらし地にひれふして

地に額（ぬか）をつけ子の生命乞う母の望み絶たれぬさるぐつわにて

生命乞う母ごの叫び消えしとき凜と響きぬ捕虜の「没有法子！」

新兵は押れてきたのか、それとも教官のつわものだてという要求を容れたのか、徐々に声に張りが加わり、先き手を担つた兵のように怖じ氣を見せなくなり、四

人目もすでに生命絶え、突き出される剣尖に、ものゆのさまにゆれていた。その時自分の想念が、どこでどうしたのか、五人目の捕虜を一番最初に刺突するのが自分になると計算をしていた。その事が分つた時、衝撃的に、山形駅で父と別れる時の父の一言が蘇った。

「神様を忘れないでくれ。事にあたって判断に窮したならば、自分の言葉でよいから祈れ。信仰も思想も良心も行動しなければ先細りになる許りだぞ……」

彼は今更の様に、父のその一言に力を得て祈りを始めた。唯一言「神様、道をお示し下さい、力をお与え下さい」。それは今尚忘れかねる、幼児の祈りにも似た拙い貧しい祈りと希いであつた。眩きとも独語ともつかぬ祈りの中で、中国大陸における黄塵来襲前に聞く大地の深处で轟く、重くこもつたような音と共に、自分の体全体が巨大な剣山で挟み付けられたと思うような激痛と共に、神のみ声を聞いた。

「汝、キリストを看よ。すべてキリストに依らざるは罪なり。虐殺を拒め、生命を賭けよ！」

そうだ、祈ろうと考えようとの道しかない！既に四人は殺され、もう一人は確実に殺されるであろう捕

虜と共に、この素堀の穴に朽ちる事になろうとも、拒否以外に選択肢はない。殺すものか！……

鳴りとよむ大いなる者の声きこゆ「虐殺こばめ生命を賭けよ」

時間の流れは自分の想念とは関わりなく流れ、血と人膏（あぶら）で赤黒く光る刺突銃が私の手に渡されていた。今でも私に銃剣を渡した同年兵の声は耳に残っているが、自分がいつどのようにして刺突銃を握つたのか覚えていないし思い出せない。そして「信仰」を挟んで教官との問答となつた。

「おい渡部、お前は信仰の為にパロを殺さないというのか！」どすのきいた大声と眼球の飛出しそうな厳しい目つきであつた。

「はいそうであります」彼の一言は、途方もない大声で四方に響き渡つた。

「捕虜殺すは天皇の命令」の大音声眼するとき教官は立つ

「殺す勿れ」そのみおしえをしかと踏み御旨に寄らむ
惑いことなく

祈れども踏むべき道は唯ひとつ殺さぬことと心決め
たり

虐殺されし八路と共にこの穴に果つるともよし殺
すものかや

新兵ひとり刺突拒めば戦友らみな息をのみたり吐く
ものもあり

縛らるる捕虜も殺せぬ意気地なし国賊なりとつば
をあびさる

以後の私は、一切の資格が剥奪され、時に人間扱い
さえ受けられず、敗戦し復員時にも尚「大日本帝国陸
軍二等兵（最下級）」であった。しかし私は今尚その
階級であった事を

「栄光」と思っております。

当日は唾を吐きかけられ胸ぐらをこずき廻された
が、教官の一言「処分は後ですから演習を続けよう」
で、事態は進行した。私に加えられた爾後のリンチと
差別は、汝殺す勿れを、上官にも戦友にも説かなかつ

た事への罰であったのかも知れない。しかし「捕虜を
ころすことは天皇の命令だぞ」の一言を、神のみ言葉
の告知神のみ言葉の告知「虐殺を拒め」の前には、踏
む言が許されなかった。誰に従うかはこの場合選択の
余地がなかった。信仰が何だ！そんなものは天皇陛下
に対して不忠になるだけだと言う罵言は容れられな
い。戦友の侮り驚き蔑みの中での生活は、絶え間のな
いリンチと共に通信兵になる為に転属するまで続い
た。

毎日毎夜加えられるリンチは「忍耐は練達を生
じ・・・云々」のロマ書五章三節四節を心の中で繰り
返す事で耐えた。リンチ、それはゲートルリンチ、対
面ビンタ、水責め、匍匐（ほふく）、捧げ銃、殴打（帯
革、軍靴、銃把）等々、人知で考えられるであろう殆
どの私刑は、死を除いて経験する事となった。

かほどまで激しき痛みを知らざりき巻ゲートルに打
たれつづけて

三八銃両手（もろて）にかかげ営庭を這いずり廻る
リンチに馴れ来

渡部二等兵による捕虜虐殺拒否の情報は、中国人たちの耳にも入った。

炊事苦力ゆき交いざまに殺さぬは大人なりとぞ声細め言う

むごき殺し拒める新兵の知れたるや「渡部」を呼ぶ声のふえつ

小さき村の辻をし行けばもの言わず梨さしいだす老にめぐりぬ

村人のまなざし温しいと小さきわがなしたるを誹ることなく

〈感想〉

渡部良三のこの講演記録の中で語られる、捕虜（パロ）虐殺、大日本帝国陸軍の刺突銃による新兵教育、上官達の態度、そしてその凄惨な場面を見つめる渡部良三自身の飽くまでも冷徹な眼差し、心の動き、そし

て刺突銃を手にして、神の啓示「虐殺を拒め」が「天皇の命令」も「死」も超越する様子が淀みなく語られる。私はキリスト教信者ではないが、キリストの奇跡の片鱗を覗いたような驚きを覚えた。

残酷なことを見たり聞いたりしたくはないものだが、しかし読み進むうちに「この、酷き事を」。まず事実を知る事が大事だと考えるようになった。彼が体験した捕虜虐殺の凄惨な場面や拷問、そして日本軍の一般市民に対する様々な残虐行為など、彼の体験をかれの冷徹な心で受け入れ、人々に広く知ってもらいたいと思うようになった。

人は生まれて、人を殺してはいけない、ものを盗ってはならない、人に暴力を奮ってはならないと言われて育ってきた。それが真逆のことを教育するのが軍隊である。大日本帝国陸軍初年兵への教育で、刺突訓練は「一人前」の兵士になるために必要なことと考えられていた。例えば、陸軍第五九師団長の藤田茂は、「兵を戦場に慣れしむる為には殺人が早い方法である。即ち度胸試しである。之には俘虜を使用すればよい」、
「なるべく早く此機会を作って初年兵を戦場に慣れ

しめ強くしなければならぬ」という方針で刺突訓練を命じていた。これが軍隊なのか。戦争は天皇の名の下に、人間抹殺行為を展開してゆく。

天皇の戦争責任も思い浮かぶ。さらに天皇制とは何なのか。皇室と一般国民との人間同士らしい接点の有りようはどのようなにあればいいのか、など色々思いをめぐらしたりする。

戦後七十年、私六歳のとき満州から引き上げてきた子供も孫も曾孫も元気に平和のうちに生きている。知らぬ間に不穏な空気が広がってはいけない、戦争に組み込まれてはいけない。この歌集に出会いしみじみ平和の大切さがわかる。

良三氏は捕虜刺突を拒否した。命を賭けての判断をしたことに衝撃をうけた。なぜ拒否できたのか。そしてその後のあらゆる私刑（リンチ）を乗り越えて、生還できたのか。

血と人膏まじり合いたる臭いする刺突銃はいま我が手に渡る

鳴りとよむ大いなる者の声きこゆ「虐殺こぼれ生命を賭けよ」

「捕虜殺すは天皇の命令」の大音声眼するとき教官は立つ

人は皆人を殺してはならんと育てられる。「汝、殺すなかれ」というキリスト教徒としてのこどものころから躰けられわかつていても、迷い続けた。やはり父親の言葉、そしてキリストの声を聞く。良三自身は確固たる反戦思想などはなかったという。だから捕虜刺突の際にどうすべきか迷い、ためらい、堂々巡りの思慮を繰り返していた。「今に到るも、なぜ、自分の志を通すことができたのか、私自身さえ解らないところがある」という。

父弥一郎が、「いかなる困難に遭遇しても、神の存在を疑うな。神は必ずお前の避け処を用意してくれる」と繰り返していた事が、心の中で生きていたのかもしれないと振り返る。「汝、キリストを看よ。すべてキリストに依らざるは罪なり。虐殺を拒め、生命を賭けよ！」という声を聞くのである。

「捕虜をころすことは天皇の命令だぞ」「信仰が何だそんなものは天皇陛下に対して不忠になるだけだ」という罵言や戦友の侮り驚きの中での生活は、絶え間のないリンチと共に通信兵になる為に転属するまで続いた。

毎日毎夜加えられるリンチは「忍耐は練達を生じ・・・云々」のロマ書五章三節四節を心の中で繰り返す事で耐えた。

そのロマ書第五章一―五節とは

1このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。

2わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導きいれられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでゐる。

3それだけではなく、患難をも喜んでゐる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、

4忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出すことを知っているからである。

耐えられたのはロマ書3の患難を喜ぶ、なぜなら、患難は忍耐を生み出し、4の忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出す。心の中で繰り返し返すことで耐えた。キリスト教信者の奇跡の片鱗を覗いたような驚きを覚えた。

この歌集の短歌（総数924首）は詠われた時期によって、動員中のもの（700首）と動員前後のものに分けられる。歌作は、新兵がわずかに自由な時間を確保できる「厠」のなかでおこなわれた（42首）。

刺突訓練、凄惨なリンチ、そして燼滅作戦など、否応なしに迫り来る過酷な出来事は、渡部の気持ちも昂ぶらせ、滅入らせ、そして、傷つけた。あまりにも過酷な体験は語る言葉を失わせる。渡部は、体験そのものを対象化し、凝縮された言葉をつむぎだすことによって、ある種の失語状態から生還した。「厠」という窮屈な場所で歌を作ることが、渡部を生き延びさせたのであり、何よりも、歌を詠むことこそが、「耐えて生きる拠りどころ」になったのである。

膨大な短歌はどれもひしひしと伝わる。学徒出陣から復員までの作品からも書き出すことにする。

微兵官わが鞆丸を握りたりだみ声に言う「甲種合格」

朝飯を食みつつ助教は論したり「捕虜突殺し肝玉をもて」

天皇の赤子の軍になぶり殺しうくるとも吾は踏みたがうまじ

生きのびよ獣にならず生きて帰れこの酷きこと
言い伝うべく

むごき殺し拒める新兵の知れたるや渡部を呼ぶ
声のふえつつ

逃げのびよ逃げおおせよのわが祈り戦友にみの
らずとらわれはてぬ

戦友を焼く煙は白くたゆたえりふくらみそめし
麦の穂波に

唐国の大地を濡らす慰安婦の涙を凌ぐ犠牲あり
や

故里の父囚われし一字ありて親族の浴ぶる八分
おそるる

靴底に擦れるマッチの青き火に炎あがりぬ民家
を焼くなり

三光の余りに凄しきしわざなり叫び呻きの耳朶
より消えず

にらみ合う三日二夜は長かりき物原のさまに屍
ふえつつ

双乳房を焼かるとうにひた黙す祖国を守る誇
りなるかも

重慶や徐州の道程をはかりたり戦争の始末す
むを知れば

聖戦の旗印かかげて罪もなき人死なしめし報い
きたりぬ

絞首刑七人なれど闇市に人群がりて昨日に変ら
ず



母の手紙

―第二次世界大戦と

父母の激動の歴史―

宮崎 順子

母・千代は、大正五年に胆沢郡金ヶ崎町谷地の農家に生まれた。母の両親は二人とも岩手師範学校を卒業してから教師だった。

母が亡くなって十七年目になるが、第二次世界大戦と父母の激動の歴史の一部を知る古い手紙が見つかった。

―母の手紙―

岩手県引揚援護会宛 申立書

私は昭和十一年内地にて紺野正志と結婚しました。

翌十二年春に長女順子が誕生しました。当時私達は農業を営んでおりましたが、夫は満州国の日系警察官募集に応募致しまして、その年の四月に日系警察官として単身渡満いたしました。

私達母子は昭和十五年六月に渡満いたしました。夫は家族のいない身軽な四年間は、ほとんど国境に近い狼溪方面を勤務しておりましたが、私達家族が渡満してからは、主として市街地に勤務致しました。昭和十七年十二月に長男出生致しました。私達親子は内地を離れて居りましても家庭的には幸せな生活でございました。昭和十八年になり長女順子の小学校入学が迫り、満州の地に於いて、日本の教育は難しくその年の二月に、私は長女と生まれたばかりの長男を連れて一旦内地に帰ってきました。そして夫の里に長女を頼み、小学校に入学させまして、四月に再び渡満致しました。その間にも戦時下にある満州の情勢が益々緊迫してまいりまして、ぼつぼつ日本人の奥様達は帰国し始めて居りましたが、昭和十九年十二月には次男正博出生いたしました。小さい子供二人を連れて、単身と言っても私達親子の帰国も、もうどうにもならない程

に満州国には混乱が頻頻に起こっておりまして。

昭和二十年七月には、当時私達は安図県城内特化区に居住致しており、夫正志は、城内にある警察署に勤務しておりましたが、満州国の満警討伐隊が編成され、安図県で正志がその盗伐隊の隊長を命ぜられました。そしていざ討伐隊の出勤となった時に終戦を迎えました。

昭和二十年八月十五日、その時は、安図県城内にはまだ電気が入っておりませんでしたので、ラジオ等聞くことも出来ず、県公署職員は無電で終戦は知りませんが、一般民にはその終戦になった事がわかるまでには、十五日の丸一日かかりまして、やっと日本が連合軍に負けた事を知りました。

終戦と同時に、外地に居住する日本人の全ては、朝鮮人、満州人との立場がすっかり逆転してしまいました。

日本の勝利を信じ、一生懸命外地で奮闘努力しておりました。日本人の皆さんのあの時の言いようのない気持ちには、とても書き表すことはできません。

終戦と同時に日本人の全てはもう職場を追われて、

宿、住居を失い翌日からは、みな、奥様達までも苦力（クリー）して、その日その日の生活を支えてまいりました。まあそれでも、働きさえすれば、どうにか食べるだけにはできましたが、私達の生活は、夫が警察官であった事、討伐隊長と名をつけられた過去があったばかりに、常に私達の生活は中共軍の監視の中になりました。

昭和二十年八月十五日の終戦から一年を迎えた時までに、夫は二十数回も中共軍によって拉致されました。いつもなら十日位で帰宅を許されておりましたが、その終戦一年目を迎えた、二十一年八月十五日の夜中に再び中共軍十四、五人が私達の住居に土足で入り込んできました。家財道具、衣類等の殆ど全部に封印をしてみました。

そうして又、夫はそのまま連行されてしまいました。そうしているうちに八月三十一日に日本人に引揚げ命令ができました。

九月一日八時までには、この安図県城内を引き揚げてしまうこと、時計指輪等の貴金属の全ての持ち帰りは許さぬ、もし、これに違反した者があつたら銃殺に処

す。と伝達されました。内地に帰れる嬉しさにそんなものは何もいらぬ必要ない、唯、唯、内地に帰れるその喜びに、私達日本人安図在住の千人程は、助け合つて、引き揚げてまいりました。その時私は、小さい子供を連れての引揚げは大変なので、出来るなら夫と共に引き揚げて来たいと思ひまして、安図県城内特化区の留置所に、夫を出所させてください、とお願ひに行きました。が、いくらお願いしても許してもらえず、安図に夫を残して、日本人の皆さまと一緒に子供を連れて引き揚げてまいりました。引き揚げて来る途中の食事は満州国から支給されましたが、朝晩の二回だけの食事で、それもこおりゃん飯（皮が固く赤みを帯びた雑穀で玄米に似ている）一膳と、味噌汁一杯だけの食事でございましたので、ほとんどの人は栄養失調になりました。皆、骨と皮ばかり、汗とほこりと日に焼けて真つ黒くなり、私達引揚げ者の顔は、もう終戦前の日本人の顔とは思われぬ程の痛ましい姿でございました。

そうして十一月一日内地佐世保に上陸するまでに栄養失調でコレラ、チフス、赤痢に罹り罹つた人は殆

ど死んでしまいました。

大陸の無蓋車で輸送されて来る途中に亡くなった方々は、そのまま途中に葬られ、船の中で死亡した方は毎日水葬され、四百人以上も栄養失調と疲労と病気で亡くなりました。

やつと、佐世保に上陸、日本の土をしつかりと踏み、そして青畳の上で、赤いお膳に真白いご飯、塩ますに漬物、野菜の入つた、味噌汁で、ご飯を頂いた時のあの感激、祖国の懐かしさ、有り難さ、あの時の感激は一生忘れることは出来ないでしょう。

五日に佐世保を出発、やつと家に着いた時は十一月十一日だつたと思ひます。

それから、家で八反ばかりの農地を働き生活をしておりましたが、二十五年五月に大阪の小羽根平吉様と言うお方から夫正志の死亡を知らされましたが、唯これだけで夫の死亡を信ずることは出来ず、何か記事でも載つてないかと、（もしや引揚げ者に混じつて帰るんじゃないかと思ひまして）新聞を毎日見て居りました。

昭和二十八年の夏の頃でした、北海道の人で、満州に行き獵をしていたアイヌ人の川村才登様から、夫正志の死亡を知らされました。続いて十月日本政府から正志の死亡通知を頂き、初めて死亡を確認致しました。しかし通知を頂きましたら、埋葬する夫の物は何もございませんでしたので、以前家にいた時に使用しておりましたキセルを、遺骨代わりにしました。昭和二十八年十二月二十二日の命日に自宅に於いて葬儀をしました。

以上の様な事情でございましたが、二十八年の最後の夫の死亡を確認しますまでは、やはり、何時かは、夫が帰ってくるという、ある程度の望みもありましたが、死亡後は、夢を見る様な考えなど、到底、許されず、三人の子供達と夫の母を抱え、生きる事のみに一生涯懸命でございました。

そして、それぞれの子供達は高校だけは卒えました。長女も大学進学希望もありましたが、母親の苦しさを理解してくれまして進学も諦め技術を身につけてくれました。

長男は電気技術を身につけ電気関係に就職、二男は現在修業の途上でございます。一回の家事を済まして、私達は、以上の様な苦勞をしてまいりましたので、今後もどんな壁にぶつかるとはわかりませんが、子供達はそのれに対応出来るだけの気力は出来ているし、出来るものと信じております。

以上の様な事情でございます。どうぞ、私のこの気持ちをご理解の程をお願い申します。

昭和四十四年十二月二十二日

右 紺野千代

母の手紙(申立書)を読んで

満州からの引揚と一括りには言うことはできない。命を削って生きた母の手紙を何十回となく読んだ。母と共に過ごした歳月が走馬灯のように浮かぶ。読み返す度に胸が苦しく喉の奥が熱くなる。

母の叫びが今も聞こえるようだ。

父の消息がわかるまでの八年間、洗い物をする時などに

「待てど暮らせど 来ぬ人の

宵待ち草の やるせなさ」

と、きれいな声で歌っていた。

父に語りかける二人の世界を犯すようで、私はいつも物陰にかくれて聞き入っていた。

〃 月日が過ぎて

母が晩年に認知症になってからは

「父さんが腹を空かして帰って来る。何を食べさせたら良いの？」と日に何度も電話をかけてきた。仕事
中の私は涙した。

腐って捨てた食物を拾って食べようとした。同居していた義妹は、気の休まる時がなかったようだ。

開所したばかりの佐倉河のグループホームにお世話になり、食べ物を前にしてもグチャグチャにつぶして口に運ばず、食べ方も忘れてしまったようだった。

三か月後に八十六歳で父の元に旅立った。

☆千三忌・駄句を詠む（2019年10月24日）

来年も元気に集まりましょう千三忌

各々の歴史を語り一人一言

終戦前日二子の山にリヤカーそかい

沖繩に行こうと千三忌

吾亦紅

千三忌墓参の出会い秋日和

お膳に笑顔あふるる千三忌

沖繩の歴史は今も千三忌

戦争の思い出激し真吾さん

恵さん立命館で准教授

又女

ヘレナ・ドウニチ・ニヴィンスカ さんを偲んで

田村和子

今から二年前の二〇一七年六月、わたしは五年ぶりにポーランドへと旅立った。南部の古都クラクフで開かれるポーランド文学翻訳者会議への参加が一つの目的だったのだが、それ以上にわたしにはどうしても会いたい人、会わなければならない人がそのクラクフにいた。

数年前から成田とワルシャワの間には LOT という直行便が飛ぶようになり、成田を午前十時二十分に離陸した LOT 便は現地時刻午後二時二十五分にワルシャワのシヨパン空港に着陸した。これまで日本からポーランドに飛ぶにはヨーロッパのいずれかの主要

都市で乗り継ぎしなければならなかったもので、ずいぶん楽になった。機内で出される二回の食事を楽しみ、座席前の画面で映画を観たり、イヤホンで音楽を聴いたりたりしながら少しまどろんでいたら、飛行機はいつの間にか着陸体勢に入っていた。

シヨパン空港から国内便に乗り換えると、クラクフまでは一時間ほどの飛行で到着できる。けれど、わたしは敢えて鉄道で行くことを選んだ。今回のポーランド滞在は正味わずか一週間。少しでもこの国の変化を自分の目で確かめたかった。ワルシャワ中央駅の裏にできたガラス張りの大きな商業施設がわたしの目に飛び込んできた。その一方で、共産主義政権時代にソ連から贈られた文化科学宮殿は外から見る限り、今なお健在だった。この宮殿は代表的なロシア建築物で、モスクワ大学と同じ様式だ。今も昔も多くのワルシャワ市民は目の上のたんこぶのようにこの建物を見ている。

ワルシャワに到着して一時間後、わたしはクラクフ行きの特急列車の客となった。かつては五時間近くかかっていたのんびりとポーランド南部に向かっていった鉄

道は、今は、もっとも新幹線並みとはゆかないものの、ずいぶんスピードアップして三時間でクラクフに到着する。車内もきれいになっていた。

車窓から外をながめながら、わたしは初めてポーランドに足を踏み入れた時の事を思い出していた。今から四十年前、一九七九年の秋だった。土の中に棲むトビムシの研究者の夫がクラクフの科学アカデミーで一年間、現地スタッフと共同研究することになり、子どもの頃からキュリー夫人（本名はマリヤ・スクウォドフスカ・キュリー）に憧れていたわたしは二人の小生だつた娘を連れて同伴した。キュリー夫人の祖国を見るために。

国から交通費が支給された夫は飛行機でワルシャワに入り、わたしと娘たちは一番安い手段を考え、まずは横浜から船でウラジオストクに渡り、ウラジオストクからハバロフスクまではシベリア鉄道、ハバロフスクからモスクワまでは飛行機、モスクワからワルシャワまでは再び鉄道という複雑な行程で、一週間かけてワルシャワ入りした。横浜からの船は丁度、日本に接近していた台風の影響で大きく揺れ、娘たちもわた

しも船酔いで船室に閉じこもったままだった。そんな時に同じ船にモスクワのサーカス団一行が乗り合わせているとの情報が入り、わたしたちはよろよろしながら船室から出た。揺れが少し収まった甲板では何と首輪を付けた小熊が散歩を楽しんでいるではないか。娘たちはその光景に驚き、吐き気はいつの間にか消え去ってしまった。

ワルシャワ中央駅で無事に夫と合流し、その夜はワルシャワに一泊。翌日午後のクラクフ行き列車に乗った。急行電車のはずが、途中、何回も停車し、ついには停電が理由で動かなくなってしまった。車内は真っ暗闇。ただ、なぜか暖房は効きすぎるくらいで、夫は上着を脱いで網棚にのせた。三時間遅れの列車は真夜中になってようやくクラクフに到着。下りる準備を始めた夫はコートをはおり、内ポケットに手を入れた途端、青ざめた。入っていたはずの財布がもぬけの殻だった。

初めてのポーランド滞在は散々な幕開けで始まった。それからの一年間、大変な思いはもちろんそれだけではない。何せ、汚職まみれで政権幹部だけが甘い

汁を吸っている当時の社会主義体制下ポーランドでは食料品、日用品が著しく欠乏し、商店の前には長い行列が絶えなかつた。ところが、その後、ポーランドという国の歴史と文化に、ポーランドの人々の生活にわたしの興味と親しみは大きく膨らんでいった。その国を知るには住んでみなければ分らない。それまでロシア語の科学文献の翻訳を内職のようにしていたわたしは、ポーランドでロシア語にも少し磨きをかけようと考えていた。当時のポーランドはソ連の傘下であり、公教育ではロシア語が必修で、ほとんどの国民がロシア語に通じていると聞いていたからだ。

その考えの甘さ、浅はかさを思い知らされたのは、ようやくわたしたちの生活が軌道に乗り始め、娘たちは学校生活になれ、わたしにも精神的余裕が生まれ始めた滞在後半に入ってからだった。ロシア語を勉強したいと言うと、ほとんどの友人、知人は顔をしかめ、首をすくめるだけだった。全てはポーランドの歴史を知らずにいたわたしの無知が原因だった。

帰国後、ロシア語ではなく、ポーランド語の勉強に本格的に取り掛かかったのは当然と言えば当然の成

り行きだった。

あれから四十年、今回の短い旅でわたしがクラクフで会いたかったのは『強制収容所のバイオリニスト』（原著タイトルは『わたしの生の道』の著者ヘレナ・ドウニチ・ニヴィンスカさんと共同執筆者のマリア・シエフチクさんだ。わたしの場合、ある作品の翻訳に取り掛かる前には、すでに著者が他界している場合を除いて、先ずは原著の著者に会い、作品内容に関してだけではなく様々なおしゃべりをしてから翻訳に取り掛かってきた。ただ、『強制収容所のバイオリニスト』に関しては日本で翻訳出版されるまで一度も著者に会ったことはなかった。

翻訳者会議最終日の夕方、わたしは胸を躍らせながらヘレナさんの住まいを訪ねた。そこはかつて、単身で一年間留学していた時に住んでいた学生寮からほど近いクラクフの北西端にある古い集合住宅だった。四階までの階段を息を切らせながら一気に駆け上がり、ドアのベルを押すと、マリア・シエフチクさんがドアを開けてくれた。狭い玄関から見える居間では薄

いピンク色の花柄のスーツに身を包んだヘレナさんが背筋を伸ばして待っていた。来月には百二歳の誕生日を迎えるとは思えない気迫が感じられた。

気持ちは若くてもヘレナさんの体はずでに無理のできない段階にあつた。それは聴覚、視覚、そして歩行能力に顕著に現れていて、マリアさんが終始そばで支えている。軽い夕食をいただきながら、一時間弱、わたしはほとんど耳の聞こえないヘレナさんとマリアさんを介しておしゃべりをした。

「自分の過酷なアウシュヴィッツ体験記を日本人々に読んでもらえるなんて想像もしませんでした。九十五歳になるまでは強制収容所にいたことをほとんど公言しないようにしてきましたし、結婚した夫にさえ話さなかつたのですから。まして一冊の本にまとめるなんて考えてもいませんでした。それが「ヒトラ」が作った強制収容所はなかつた、囚人を殺害したガス室はなかつた」などと言う人が現れたりして、やはり真実を知らせなければあの世には行けないと思つたのです。でも、正直言つて、本になつてからも本当に書いて良かったのかと、逡巡する日々でした。それ

が日本で、シヨパン愛好家が多いと聞く日本で、この本が出版され、多くの人に読んでもらっていると聞きました。今は書いて良かったとつくづく思います。予想外に長生きできているのは、自分の体験を次世代に伝えるためだと、今は思っています」

ひとり暮らしをしているヘレナさんは多くの人々に支えられて日々を過ごしていた。病院や散歩に連れ出してくれる人、買い物してくれる人、お昼を届けしてくれる人：中でも二〇〇四年にオシフィエンチム（アウシュヴィッツはこの町のドイツ語名）の教会で知り合つてから親友として付き合っているマリア・シエフチクさん（中学校で歴史を教える教師）の存在は大きく、週末になるとオシフィエンチムからクラクフにやつて来て、ヘレナさんの世話に当たっている。マリアさんは『強制収容所のバイオリニスト』の共同執筆者でもあり、彼女が背中を押してくれなければこの本は書けなかつた、とヘレナさんは何度も繰り返し返した。

一九一五年生まれのヘレナさんは第一次世界大戦と第二次世界大戦を体験した。そして戦争から受けた苦しみは戦争終了と共に終わったわけではなく、戦後

もずっと付いて回った。多くの収容所仲間には戦後、心を病んだと言う。ヘレナさんは幸運にも音楽書出版の仕事に没頭することで収容所トラウマを何とか回避できたようだ。

彼女はなぜ強制収容所体験を夫にさえ話すことができなかったのだろうか？

ヨーロッパでは今なお反ユダヤ思想が根強く残っていて、ポーランドでも例外ではない。ヘレナさんはユダヤ人ではなく、生粋のポーランド人だ。ヒトラーはユダヤ人に対しては絶滅に値する劣等人種として有無を言わず殺害し、ポーランド人に対しては労働力としてドイツ人のために使おうとたくらんだ。従って強制収容所の犠牲者の多くはユダヤ人で、収容所に入っていたと言うと、今なお一律にユダヤ人ではと云う憶測を受けるのだ。もう一つ、ヘレナさんには収容所体験を言いたくない大きな理由があった。それは囚人音楽隊に入っていたからだ。音楽隊員は他の囚人よりは少しましな環境にあり、そのお蔭で生きのびることができた。それは事実だ。ところが、他の多くの収容者は殺されたのに、音楽隊員はざる賢く振る舞ったこ

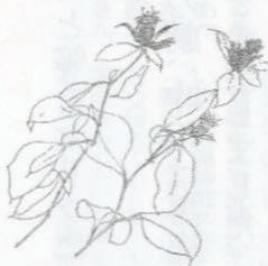
とで、生き延びたのだと、戦後になってもあからさまに非難する者たちがいるのだ。戦争の邪悪さを思わずにはいられない。

彼女の百二歳と十一カ月の人生はまさに戦争に翻弄された「生の道」だった。

最後に麗ら舎読書会の会員、佐藤恵美さんがヘレナさんのために作ってくださった弔句を紹介し、この小文を閉じたい。

- ・ 夏雲やアウシュヴィッツのヘレナ逝く
- ・ 梅雨しとど一糸まとわずガス室に
- ・ カンナ咲け音楽隊の魂よ
- ・ 雲の峰 ヒトラーの悪業 赦すまじ
- ・ 七夕や南北の平和を胸に

エミ



千三忌と豊彦さん

渡部 恵子

「地域に根ざし、地域を掘り起こす」ことを念頭に、たくさんの方の教育実践に取り組んできた豊彦さん。そのなかでも、平和教育には特に力を入れておりました。子どもたちと平和について学び、学んだ後はそれを発信する、そのことで子どもたちに本当の力を身に付けさせたいと考えていたようです。

そこで、取り組んだのは自分で脚本を仕上げた劇『ぼくらの町にも戦争があった』です。この劇は、子どもたちが戦争で亡くなった方々のお墓調べを行っているところから始まります。戦没者名簿から戦死者の総数、戦死者の年齢、戦死年、戦死場所などを集計

しグラフ化し、そこから気付いたこと等をセリフに加えています。

いままでに十数校で行われたこの劇、昨年は男鹿市にある二校の小学校六年生が上演を希望しました。早速、豊彦さんは地域のお墓調べを始めました。そして、戦争についての授業を行い、劇の練習、小物作りのアドバイスをしに学校へ足を運びました。十一月の学習発表会で行われたこの劇は、どちらの学校でも観客に感動を与え、大きな拍手をいただいたようです。

豊彦さんは、このように戦死者の墓について調べるうちに麗ら舎の活動を知ることになったようです。活動を知り、小原麗子さんに電話をし、手紙を出した記録が残っています。

「このような中で、小原さんたちの活動を知りました。『石ころに語る母たち』を読みました。また、簾内啓司さんの『千三忌』を読みました。そして、別冊『おなご』を読ませてもらいました。とにかく小原さんをはじめ、みなさんの取り組みや一人一人の「文」に圧倒される思いです。(手紙の抜粋)」

そして、豊彦さんは千三忌に参加するようになり、

私も二回ほど一緒に参加させていただきました。仲間に入れていただいたことに大変感謝しております。豊彦さんは、毎年、皆さんとお会いできることを楽しみにしております。

子どもたちが劇を上演してから約三か月半後の今年二月十一日に豊彦さんは息を引き取りました。最後まで、子どもたちと平和教育に取り組んでいました。このエネルギーはどこからくるのだろうかと思議でたまりませんでした。

千三忌を知り、「二度と再び新たな戦死者のお墓をつくらせてはならない」という思いをさらに強くしたのだと思います。豊彦さんがまいてきた平和の種が、たくさんの方々の心で芽を出しますように願っております。



地域学習、平和教育を実践した元小学校教諭

渡部 豊彦さん

2月11日 65歳で死去 男鹿市

男鹿南秋地区を中心に、地域の題材を掘り起こした地域学習と平和教育を長く実践してきた。草の根の目標で社会を見つめ、弱い立場の人に心を寄せる姿勢を徹底。地域の人々の思いや平和の大切さを、子どもたちと教員に伝え続けた。

八郎瀧町出身。30代から赴任先の地域の題材を幅広く授業に取り入れた。大型商業施設の

築いた授業、今も継承

出店問題、男鹿市金川地区で江戸時代に起きた「ハタハタ一揆」、ナマハゲなどの伝統

披露し、平和への思いを自分たちの言葉で表現する。「この学校でも取り組める平和教育を」という考えから生まれた授業は、これまで10校以上で取り組まれてきた。昨年は男鹿市の脇本第一小、美里小



学習発表会で「ぼくらのまちにも戦争があった」の劇を披露した脇本第一小6年生と記念撮影する渡部豊彦さん

「残されたたくさんの実践をどう伝えていくか、大きな宿題をもらった」と声をそろえる。(三浦ひろ)

行事…。地域内に足を運び、子ども自身を考えさせ発信させる指導を重視した。多くの学校に広がったのが、25年ほど前に始めた6年生の社会科授業「ぼくらのまちにも戦争があった」。児童が学区内の墓地や戦没者名簿を調べ、どれだけの人が、いつ、何歳で戦死したのかをまとめる。最後は学習発表会で劇を

れた後も、治療を受けながら小学校の授業に協力。先月の県民間教育研究団体連絡協議会では、講演で自身の実践を紹介し平和教育の大切さを訴えた。

死去の5日後、第54回県多喜一祭で多喜一祭賞が贈られた。妻恵子さん(61)によると、授賞式でのスピーチに盛り込む言葉をメモに残していたという。教員仲間や恵子さんは

昨年11月3日

千 出 会 い 彦 さ ん

朝倉恵子

私の手元に平成元年一月二九日付の郵便封筒があります。昭和六四年一月一日付の石川純子先生からの賀状お礼のお手紙です。私はその一、二年前から石川先生のご自宅での読書会に参加させて頂いておりました。東京から夫の仕事でUターンした私は仕事もやめたうえ、知り合いも少なかったのです。子育て中の主婦が子連れで参加させて頂き、うるさい幼児を厭わず温かく迎えてくださいました。黒いネコを飼われていて、子どもは「ネコのおばちゃん家」と言って親しんで通わせて頂きました。内容は難しかったのですが、会員の方々のご意見を伺い、繋がりを感しました。

しかし、子どもの行事やパートに出て常勤として働くようになり足が遠のいてしまいました。

石川先生の封筒には「垂乳根の里便り」とあり、先生は麗ら舎読書会に力を注いでおられ、お話を伺うこともありました。

今、子どもたちはすでに手を離れ、仕事も一区切りした時に『化外のフェミニズム』に出合いました。石川先生の活動を読み、あの時先生が力を注いでいらした事がどの様なものであったかを少しながら知る事ができました。

平成元年にお手紙を頂き、人生の岐路に本と出会い、令和になって読書会に参加した事に不思議なご縁を感じました。東北のおなごたちの泣き笑い、知恵を知り、私のこれからを重ねていこうと思います。



R

停止しない思考

『わらしべ農園』便り

千葉 ちた江

野菜通信 No.898 2019年8月5日(月)版より

先週に引き続き、牛のお産の話です。今度は我が家ではなく、近所の牛。7月28日(日)午後11時30分、玄関のチャイムが鳴り、びつくりして出てみると、「牛がおつきくて出てこないから、引っ張るのを手伝って」慌てて駆けつけると、ご主人が牛のお尻に手を突っ込んで、何とか足を引っ張り出していました。足首にロープをかけて引っ張りました。びっしやっつと羊水が飛び出してきましたが、子牛は全く出てきません。見るとこれは後ろ足！逆子です。どうやら肩が

引っかかって出てこないようです。4人で力いっぱい引っ張りましたが、やっぱり出てきません。ご主人が「これは決まったな」などと、ぶつぶつ言いながら(死んだことかしら：?)、牛のお尻に手を突っ込んで、出てきた足も突っ込んで何かしていました。入江はお母さん牛の頭を固定させるために何やらしていました。だが、私と奥さんはただそれを見ているだけ…。死産かな…。それでもとにかく出さなくちゃいけないよな…。などと考えていたら、「よし、前足出てきたから引っ張るぞ」思いつき引っ張ると、顔が出てきて、さらに引っ張るとスルツと体も全部出てきました。ベロンと伸びた子牛、死んでるのかな…。いえ、生きてます。慌ててタオルで拭いてやり、ぬるま湯をかけ、もつと拭いてやり、そしてお母さん牛を放してなめさせました。べろん、べろん。お母さん牛になめられて首を持ち上げます。しばらくすると立とうとして足を動かし始めました。お母さん牛のお尻に肩まで突っ込んで何をしていたのかを聞くと、「頭を探して息をしているのがわかったから空気を吸えるようにしながら、前足を探してぐるっと回したんだ」羊水やウンコ

やいろんなものでぐちゃぐちゃでしたが、ご主人の笑顔は爽やかでした。すごい出産現場に立ち会うことができ、いい経験をさせてもらいました。稲が出穂をはじめました。カモを田んぼから、池に引っ越しさせました。

今週の野菜：12種類が書かれています。来週お届けの野菜も書いてあります。

入江敦・柳谷励子
〒028-0121 東和
町小友2区100

tell&fax

0198-44-3007

warasibetowa@yahoo.
co.jp

※お休みやご要望
は、配達の前二日
までに連絡して
いただけると助
かります。

後日談： 隣のご主人は、生きているのがわかったから、子牛の口の粘膜を手で剥がしてやり、産道と腕の隙間から空気を送り込み、息ができるようにしてあげたのだということでした。

北上山系の東和町小友に、兵庫県出身の入江さん、山形県出身の柳谷さん夫妻が、1994年11月に堆肥やアイガモでの無農薬有機栽培の稲作で入植。1998年3月臨時号には、「人の健康をつくり支えるものは薬や健康補助食品ではなく、毎日口にする食べ物です。だから、こだわってできるだけ良いものを食べたい!!」という方へ、「野菜セットと卵の宅配のお誘い」と書いてありました。現在は、田んぼが一町歩、農薬・除草剤を使わない!化学肥料を使わない!天日乾燥がお米の質を決める!もみ貯蔵・循環式精米機で精米、畑作、採卵鶏、豚、牛、山羊、アイガモ、犬、猫。

三人のお子さんたちは、社会人、学生となって家を離れています。

私は、2003年イラク戦争反対・有事法制反対の集会やデモで、入江・柳谷夫妻とたびたびお会いするようになりました。麗ら舎住人の麗子さんともよくお会いしました。柳谷励子さんは、「ブッシュは正義の戦争をするクリスチャン、私もクリスチャン。戦争は絶対反対!」と泣きながら、一言メッセージを訴えた

姿が今でも浮かんできます。その時から、野菜を宅配してもらおうようになりました。夫妻は別姓です。柳谷励子さんは未婚で出産となり、役場に出生届を出して、子どもは励子さんの戸籍に入ります。入江敦さんに認知してもらい、姓を入江にするためには、家庭裁判所に行つて姓の変更手続きをしなければならぬという事です。事実婚の出生届は女性の姓で届け出ることに民法で定められています。夫の入江の姓で、農業をし、地域とつながっています。だから、入江の姓を子どもに付けたいと言つたら、裁判所に行つて、手続きしなければならぬと言われたのだそうです。

と、はて、どうしてだろう？

夫婦別姓、事実婚の場合、子がいる場合には戸籍上非嫡出子（婚外子）として扱われ、片方の親のみの単独親権に復する（父母が共同で親権を行うことができな）いこと、相続の際の法定相続権、遺留分、配偶者控除、相続税の基礎控除や優遇措置、居住用不動産の贈与についての特例などが認められない、成年後見の問題、入院時などの証明の問題、税法上や、日常生活上の様々な不利益の問題があります。

日本国憲法は主権在民・民主主義・平和を原則として規定されたものです。そのもとに定められた法律は、国民のためにあるものです。

憲法「家族生活における個人の尊厳・両性の平等」

第二十四条 婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。

②配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、離婚並びに婚姻及び家族に関するその他の事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならない。

ところが、日本においては、現在、民法750条で夫婦の同氏が規定されており、戸籍法（1871年明治3・4年に制定されて以来、たびたび改正された。第二次世界大戦後の民法改正による家制度廃止に伴い、従来のものを全面改正し、戸籍法が制定された。1947年昭和22年12月22日に交付、翌年1月1日に施行）によって夫婦同氏・別氏が選択可能な国際結婚の場合を除き、婚姻を望む当事者のいずれか一方が氏を変えない限り法律婚は認められない。そのた

め、特に近年、選択的夫婦別姓制度を導入することの是非が問われ、裁判訴訟になっている。なお、日本で夫婦同氏が定められたのは明治民法が施行された明治31年（1898年）からであり、明治民法施行以前は明治9年（1876年）の太政官指令によって「婦女は結婚してもなお所生の氏（婚姻前の氏）を用いること」、すなわち夫婦は別氏と規定されていた。

過去には、日本以外にも夫婦同氏が規定されている国もあったが、ドイツは1993年、タイ王国は2003年、オーストリア、スイスは2013年、トルコは2014年にそれぞれ制度を改正するなどした結果、2014年時点で、法的に夫婦同氏と規定されている国家は日本のみとなった。1996年に法制審議会が夫婦別氏を選択的に認める民法改正案を法務大臣に答申したものの、20年過ぎても実現になっていない。立法と司法の怠慢である。

国連女子差別撤廃委員会の勧告

日本を含む130か国の賛成で、国際連合で1979年に採択された「女子に対するあらゆる形態の差別

の撤廃に関する条約」に、日本は1980年に署名し、1985年に批准した。この条約では、選択的夫婦別氏の導入が要求されている。そのため、国連女子差別撤廃委員会は、日本の民法が定める夫婦同氏が「差別的な規定」であるとし、これを改善することを、2003年、2009年、2016年の三度にわたり勧告している。2003年8月の勧告では、婚姻最低年齢、離婚届後の女性の再婚禁止期間の男女差、非嫡出子の扱いとともに「夫婦の氏を選択などに関する、差別的な法規定が依然として含んでいることに懸念を表明する」と勧告した。

2019年9月6日朝日新聞オピニオン&フォーラム

**性暴力が無罪になる国：「ノー」という判断、女性
はできない」それが日本の司法**

インタビュー 弁護士角田由紀子つのださん

——フラワーデモの広がりをもどくように見えていますか。

「七月に初めて参加したのですが、雨の中若い人たち

がたくさん集まっついて、感動しました。ショックも受けました。私たちは弁護士として性暴力の被害者のことは知っているつもりでした。でも、私が知っているのは司法にたどり着くことができた人たち。その手前で、被害について話すことさえ難しかった人がこんなにもたくさんいて、自分のつらい体験をしゃべっている。悔しさや切なさ伝わってきました」

「性被害を話すのは法廷でも大変です。それを街で、知らない人たちの前で話している。なにかが沸点に達し、フタが開いたのだと感じました。『女・子どもの問題』として社会の片隅に追いやられてきたテーマが、中心課題になりつつあるのだと思います。」

—— きっかけは、性暴力をめぐる無罪判決が続いたことです。問題は、無罪とした理由。特に、父親から娘への継続的な性的虐待を認めながら、「娘の抵抗が著しく困難だったとは言えない」として無罪にした名古屋地裁岡崎支部の3月の判決は、驚きでした。

「衝撃的な判決でしたが、法律家としてみると、法的に間違っているとは断言できません。なぜなら、日本の刑法は、被害者の意思に反したことが明らかな性

行為でも、それだけでは罪に問えないのです。刑法には、『暴行または脅迫を用いて』『心神喪失もしくは抵抗不能に乗じて』などの要件があり、これらに該当して初めて有罪となります。しかも、暴行などは『相手の抵抗を著しく困難にする程度』の強さが必要だ、と解釈されてきたのです」

—— 「抵抗を著しく困難にする程度」といわれても、そもそも、体が凍りついて何もできない被害者が多いのに。

「抵抗が著しく困難だったと認められても、『故意』の問題があります。同じ3月の福岡地裁久留米支部の判決は、お酒を一気飲みさせられて眠り込んだ女性について抵抗が著しく困難だったと認めました。しかし、被告は女性が拒否していないと思いきんだ可能性があると、故意が認められないから無罪としました」

「故意の問題は、殺人罪と比べるとわかりやすいと思います。心臓のすぐ脇をナイフで刺したにもかかわらず『殺す気はなかった』と弁明しても通じません。だけど、性暴力についてはこういう言い訳が通るので、泥酔してほとんど意思表示できない人とセックス

して、『相手は同意していると思っていた』というのは、心臓の脇を指しながら、『殺す気はなかった』というのと同じようなことだと思うのですが」

—— こういう判決が出るようになったのは最近のことですか。

「いいえ、以前からあります。この数年、ジャーナリストの伊藤詩織さんが実名で『性被害を受けて警察に届けたのに不起訴にされた』と告発したり、財務次官から女性記者がセクハラを受けていたことが公になったりしたことが大きかったと思います。一連の無罪判決への疑問が大きく報じられたのも、メディアの中で女性記者が増えたからではないですか」

—— しかしなぜ、理解に苦しむような判決が続くのですか。

「男女平等の度合いを示す世界経済フォーラムのジェンダーギャップ指数で、日本は昨年、世界149か国中110位でした。逆に言えば、110位の国でこういう判決が出るのは相応なのです。日本は性差別が色濃く残っているのに、それが認識できていない国なのです。」

「司法の判断に関して言えば、女性が性行為について、自らイエス、ノーを判断できる存在だと見ていないことが根底にあると思います」

—— どういうことですか。

「刑法が制定されたのは、1907年、明治時代です。家父長制の下、女性は選挙権もなく、結婚すると民法上は法的未能力者とされました。強姦罪は財産犯みたいなもので、権利を侵害されるのは被害に遭った女性ではなく、その夫や父でした。生きた人間としての被害者は存在しなかったのです」

—— 戦後は認識が改められたわけではありませんか。

「夫のいる女性が他の人と性的関係を持った場合に罰する姦通罪が戦前の刑法にありましたが、日本国憲法ができたときに削除されました。本来は、強姦罪についても議論されるべきでしたが、そうなりませんでした」

—— 今では、性犯罪は「性的自由の侵害」だと言われます。

「90年代にはまだまだ被害女性の貞操観念を問う判決がありました。次第になんとなく、『性的自由』

が保護すべき法的な利益だということになりましたが、今までに何が間違っていたのか、きちんと議論されたことはありません」

「強姦罪は2年前に見直され、被害者の性別を問わない『強制性交罪』に変わりました。110年ぶりの変更です。保護すべき法的な利益は何か、という根本の議論は、ほとんどありませんでした。」

——角田さんは2017年の改正刑法施行から3年後の2020年をめどに必要に応じて見直すことになっていることへの必要性は。

「強制性交罪から暴行・脅迫の要件をなくし、相手の同意がない性行為はすべて罰するようにすべきだと思います。でも、まず大事なものは、根本的な議論です。性犯罪の規定がどんな社会通念の下に作られたのか、歴史的な背景を踏まえて考え、今の知見や人権に照らしてどこが間違っていたのか。こうした点を検証し、そのうえで何を守るための法とすべきなのかを話し合う必要があります。条文の話をするのはその後です」

「また、条文を変えても、運用する人の頭の中が同じであれば、判断は変わりません。司法の世界は圧倒的な男社会です。法教育にジェンダーの視点をもっと取り入れることが必要です。性差別や、性暴力の被害がどういふものか、法学部や法科大学院できちんと教えなくてはいけません」

——土台から変えるべし、と。

「常識を問い返すことが大切です。この国の法律に關する常識や経験則はほとんど、男性の生活だけを基に成り立っています。常識や経験則が誰のものなのか、考えなければなりません」

私の母は家父長制度の下、嫁に行くものと決めつけられ、一人の人間ではなく、売り飛ばされるような結婚を強いられ、奴隷のように働かされる一方、家の子どもを産む存在だった。そして、麗ら舎で見聞きする生き抜いてきたおなご達のことをも思いやる。

日本の公的教育費の対GDP比率は、154か国と地域を合わせた中で3.47%の114位。

日本の債務残高の対GDP比率は、先進国中236%のダントツ1位。2位のアメリカの108%の2倍。

怪しい信用の上に立って借金を増やすのは子どもたちの資産の強奪、到来する困窮を前に私たちは何をすべきか？

女性を押さえつけ、子どもの資産を奪い、貧民層を増やしている。

2020年度の防衛費予算はアメリカの金づるか今年度予算比1.2%増、5兆3223億円

○イージス・アショア配備…指揮通信システム・迎撃ミサイル発射機などで構成されるミサイル防衛システム

○F35A戦闘機

1機当たり147億円を105機購入で1兆円

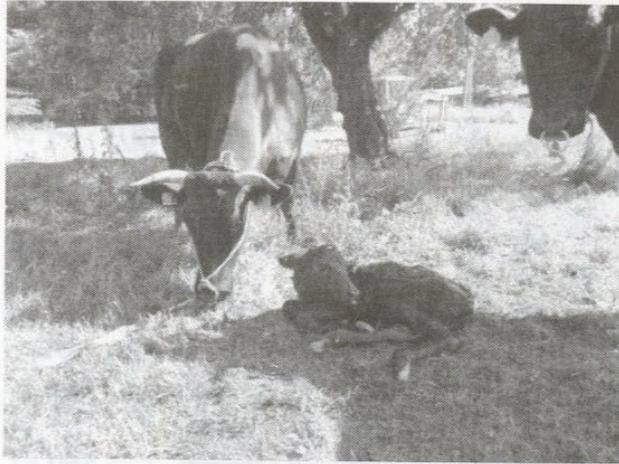
超。(最新鋭戦闘機といわれているが、来年3月には三沢基地に配備が決まっている。アメリカ会計検査院で欠陥を指摘されている機体で、重要なソフトが未完

成。空軍・海軍・海兵隊と三者の異なる要求を取り入れた結果機体構造が複雑になり、重量増という戦闘機として致命傷を負った。燃料を満載すると35トンにもなり、エンジン2個のF15の40トンに迫る。曲がれず、上昇できず、動けないと酷評されている。訓練ができないほどの深刻な部品不足と整備体制の遅延で、2022年まで遅れ込むとの見解がある。)

アメリカ製の日本で組み立てられた最新鋭航空自衛隊のステルス戦闘機F35は2019年4月26日、青森県沖に墜落した。

戦争をさせない！戦争をするな！戦争反対！
早期に選択的夫婦別姓（氏）の民法制定をせよ！

今週も、野菜や加工品と一緒に「わらしべ農園」だよりの停止しない思考が届く。



☆千三忌・駄句を詠む（2019年10月24日）

令和とは麗らかに和す読書会

オキナワを語り学んで千三忌

豊彦さん皆で祈る千三忌

映画人沖繩撮って千三忌

戦争を語りつなぐよ千三忌

災害があっても五輪即位の礼

父母を思う秋の日千三忌

平和願い麗ら舎に集う千三忌

夏の青草を秋と見間違う除草剤

稲立ち仕事は楽だが不豊作

もと

野々小道

イギリス・西ドイツでの

感動・ふれあい

〜岩手県婦人海外研修に参加して〜

渡邊満子

書類を整理していたら、今から三十三年前、海外研修に参加した時の資料・写真が出てきた。目をおしているうちに、海外で体験し、感動したことがなつかしく甦ってきた。

当時、私は五十五歳。家庭的には脳溢血で寝たきりの姑、夫は現役の銀行員、義父も現役で会社の役員として働いていた。そのような家庭状況の中で、研修に

参加できたことを考えると家庭の理解があったからだと思う。私自身については数年前にがんを患っていた。参加者の中では私が最年長。行く前には体調に十分に気をつけていた。研修中も食事をしつかりとり、休養もしていたので、私が一番元気だった。

岩手県婦人海外研修は「国連婦人の十年」を契機として、国際的視野をもつ有為な婦人を養成することを目的に県が実施しているものであった。私が参加した昭和六十二年度の研修は、長い伝統と文化に培われた豊かな国民性にふれたいとの希望により、イギリス・西ドイツ両国へ、県内各地域から十名の派遣であった。

- (1) 婦人を取り巻く諸問題と今後の婦人のあり方。
- (2) 青少年の健全育成と今後の婦人のあり方。

二つのテーマのもと、活動内容に沿った母体的な研修への参加であった。私は(1)のテーマを選択した。

イギリス全国都市婦人協会を訪問して
わが青春時代の映画「哀愁」のロンドンでの一夜が
あける。

朝六時。カーテンをあけ、窓から外を見るとまだ薄暗かった。ガス灯が赤くにじみ、路上には乗用車が列をなして駐車していた。七時半、全国都市婦人協会のあるバーミンガム市にバスにて出発。あたりもやっと明るくなってくる。

ロンドンには、今年、異常気候で雨がちの最悪の天候であったとのこと。先週はすごいハリケーンにおそわれ、樹齢何百年という大木が根こそぎ倒れていたたり、真中から真二つに折れていた。小さい黒い実が、プランプランと下がっているプラタナスの街路樹。緑の芝生と樹木の茂る自然公園が、イギリスには多いということである。

ガイドさんが「英国は階級社会なので、上流階級、中流階級（更に上中下に分かれる）、労働者階級に分かれている。住んでいる場所、建物、英語の発音（母音）も違う。高級住宅地はロンドンの北方にあり、日本人は北に住む人が多い。「屋根を見ると住んでいる人が持っているお金の額が解る」と説明した。前方を見ると日本の刑務所のような高塀が見えた。上流・中流の人たちが、あの塀の中でスポーツをしているとい

うことだった。

北上するに従って、彫刻のある一戸建ての家が多く見えてきた。家の前庭には、コバン草や百合の花が、やさしく咲いていたが、玄関には泥棒が多いため扉が厳重におろされていた。

市内を抜け、郊外に出る。青空に飛行機雲は美しい線を描き、思わずカメラのシャッターを押す。果てしなく続く緑の牧野、黄金色に色づき始めた木々の葉、遙かに眺めた白鳥の沼、あちこちに放牧している羊、牛の群れ。すっかり牧歌的風景に魅せられてしまった。バスの窓から目をこらし眺めていると、牧場には霧が降りているようだった。

まもなく風景は変わり、ビルディングが見えてきた。九時四十五分頃、バーミンガム市に入る。天候は快晴。枯れかけたあじさい、ナナカマドの赤い実が目に入る。ロンドンから約二百キロ。全国都市婦人協会に着く。私たちが待ちかねていたように、バーバラさん（会長さん）は、大きく手をひろげ歓迎してくれた。

バーバラさんから赤い紙に包んだ小さい箱を頂戴したので、早速あけて見ると、スプーンが入っていた。

こちらからは、団長の高橋さんが英語で挨拶、みんなが持つてきたお土産をお渡しする。笑顔で応待してくれる協会の方々にすぐに親近感が湧き、はじめてお会いする外国人とは思えなかった。

小太りで中背のバーバラさんは、「この方の名前はイザベルさん。公共問題に関する仕事を担当している。議会とのコンダクター、その他、この地域の会合を組織したり、女性に関する問題、学習グループを組織するなどいろんなことをしている」と言って、同じように各室を案内し、説明してくれた。

各自、個人の事務室を持ち、存分に仕事をしているように思われ、うらやましい気がした。新聞や会報を発行している男の人の室はぎっしりと書類が積まれ、倉庫のようだった。

「ここが、私たちの会の一番大事なところですよ」と笑いながら、どの部屋も気軽に見せてくれる態度に感心した。

今年は、会が創立してから丁度六十周年。ダイアモンド記念にあたるので、刺繍をした壁飾りを製作中だという。真中はプロの人をお願いし、まわりの小さい

のは、各州の人たちに作ってもらおうということである。一巡後、丸いテーブルを囲んでみんなが座ると、バーバラさんは私たちの名前を一人一人呼んだ。呼ばれた人が返事をする、その人の顔をじっと見つめ、にっこり笑ってうなずいた。コーヒーを飲み、ケーキを食べながらのなごやかな懇談であった。

バーバラさんから聞いた全国都市婦人協会の概要は次の通りだった。

- ・ 州単位からなる全国組織
 - ・ 会員の利益になる活動を目的としている
 - ・ 各州より代表。年に二回会議を開く
 - ・ 会員数、全国で15万人（手帳・会員証）
 - ・ 会費・年会費（5P25）
 - ・ 集会・一カ月に二回、三つに分かれている
- (1) 朝（小さい子供のいる若い人たち）
 - (2) 昼（年配の人、夜歩くのが怖い人）
 - (3) 夜（働いている人）

・ 活動内容 会員の希望があれば、どんな小さなことでもとりあげる

例…生花、地方史の学習、自然保護、食品問題（添

加物・缶詰)、健康問題、創造的レジャー、スポーツ、働く婦人の問題(議会に要請し、手当てをあげてもらったなど)

私は婦人会活動の中で感じている次の三点について質問した。

- (1) 会員の年齢
- (2) 会員の減少
- (3) 他団体との共催事業

最後に、バーバラさんは、国から少し補助をもらっているが自主的に運営している。経済的にも自立できるようにになりたいと話された。

きびきびした動作、意欲的に話してくれたバーバラさんが若々しく見えたので、そつとおたずねした「何歳ですか?」「ファイフティナイン」。

紙面や言葉で言いつくせない、沢山の勉強をさせて頂いた。

帰国後、今回の研修の一端を紹介する機会があり、よかったと思う。

西ドイツでは、フランクフルト市内視察、ライン川

下り、ハイデルベルグ市内視察、ローデンブルグで農家訪問、ニュールンベルグの中学校訪問、ニュールンベルグで民泊する。

ホームステイを体験して

郊外にあるアンゲリカ氏のお宅はどの部屋も素敵に飾っていて、奥さんのインテリアのセンスの良いのに驚かされた。

髭を生やした銀行員の旦那さんとグラマーな奥さん、大学生と中学生の息子さん。イエガーと言う名前の犬のいるご家庭だった。

ご家族と一緒に、ワインや手作りの煮込み料理をご馳走になる。次男のトピアス君は、私と深沢さんの未熟な英語に一生懸命耳を傾け、解るとにつこり笑っていた。又、小原さんのお土産の折り紙で素早く筆立てを作ってしまった。みなさんでお土産をとりあげて喜んでくれた。奥さんはこにこしながら、南部型染の壁掛を旦那さんにひろげて見せていた。

朝食のとき、庭の方を眺めながら、小原さんと「き

「美しい庭ね」と日本語で話していると、旦那さんが私
たちを庭に案内してくれた時はびっくりした。「勤勉、
正直、清潔」だというドイツ人の家庭生活を肌で感じ
られたホームステイであった。

研修最後の日、午後一時一〇分、飛行機はアンカレ
ッジを出発、一路羽田へと向かう。

「夕焼けがきれいよ」と、高橋さんが声をかけたの
で窓の外を見ると、黒雲の後に帯状をしたオレンジ色
の不思議な夕焼けがいつまでも続いていた。

北上駅まで迎えに来ていた金ヶ崎の小原さんの息
子さん娘さん。江釣子から来た夫、一緒に写真をパチ
リ。外に出ると機内から眺めた白い昼の半月が、北上
の上空から、やわらかい光をそそいでいた。

今回の研修で、訪問国での社会福祉施設、教育機関
の見学や婦人団体との懇談に加え、西ドイツでの民泊
等を通じて、ひたむきに生きている多くの方々から、
日本とは異なった生活観や価値観を肌で感じとる一
方で、日本の良さについても再認識した。

黄色い木の葉の散っていた、古城の坂道。巨大な樽
の前で飲んだワインの味など、思い出は尽きない。

☆千三忌・駄句を詠む（2019年10月24日）

佐藤氏の話を聞く沖縄平和は絶望に近し

秋茜しみいる空に不戦の忌

秋茜キリキリ舞うはゼロ戦に似て

恋し国満州は唾吐きゴミ撒く国だった

ボケた母父さんが来るから

ごちそう作るとそはそはし

母子草

麗ら舎の花の絵手紙癒される

ワレモコウ線香包む千三忌

千三忌白いけむりに話しかけ

英夫さん貴重なお話し千三忌

秋海棠

市民劇

『がんとり』を観て

兒玉智江

佐々木喜善氏の『聞耳草紙』にある『上の爺と下の爺』を西和賀町の昔話『モクサレオン爺いとマメオン爺い』が重なりあつて出来たという川村光夫氏によつて脚本された喜劇が北上市民劇場で演じられた。

「モクサレ」とは西和賀の方言で、愚かで怠け者という意味である。マメとは豆が転がるように、働き廻るにかけて付けた名である。オン爺のオンは、西和賀の方ではお爺さんの名へ御をつけて呼ぶ習わしがある。だから「オン爺い」になつた。西和賀地方の方言がまだ生きていて、方言の面白さが、演劇をよりいっそう面

白くしている。

昔話では、必ず良いお爺さんとお婆さん、悪いお爺さんとお婆さんが登場してきて、良い事をすれば、良い事があるし、悪い事をすれば、必ず報いが来て、悪い事が起ると教えられた。小さい頃はそういう昔話が大好きで、夜眠る前、お婆さんに聞かせられて眠りについた事を思い出す。昔話は小さい頃からの道德教育になつていた事がわかる。

『がんとり』は昔話の良い爺さん、悪い爺さんが登場するほぼ同じパターンの内容だが、ミュージカル風に演じられている。

モクサレ爺さんは川に流れて来た産まれたばかりのような小犬を拾う。が、すぐ川へ捨ててしまう。マメ爺さんはその小犬を川下で拾い家へ持ち帰り、その小犬を育てる。実は、小犬を育てる、捨ててしまうという二つの行動が人生を変えて行くことになるのだ。小犬のゴンは大きくなり猪狩りでは猪を噛み殺すまでに成長する。そのおかげで、マメ爺さんの家では猪鍋。その臭いを嗅ぎつけて、モクサレ婆さんが訪問。隠し切れない臭いがたちこめる。とうとう振る舞う事

になる。犬のゴンまで貸してくれと頼まれ貸してしま
う。貸さなければ、意地悪爺さん、婆さんになってし
まうのだ。そうなりたくないからゴンを貸してしまう。
モクサレ爺さんはゴンと一緒に狩りの仕方が解ら
ないから、猪狩にならず、腹を立て犬のゴンを殺して
しまう。マメオン爺いと婆さまは、ゴンの墓を造り柳
の木を植える。柳の木は、水やりに従い大きくなって
行く。

大きくなった柳の木で挽き臼を造り、搗く米がない
のに挽く真似をすると、米がザーザーと流れる
ように出てくる。お金が出てくる真似をしたら、お金
がザクザク出てくる。その音を聞き出して、モクサレ
婆さんがやって来る。お米が湧いて出る挽き臼を隠せ
ず、またもや、モクサレ婆さんに挽き臼を持って行か
れてしまう。

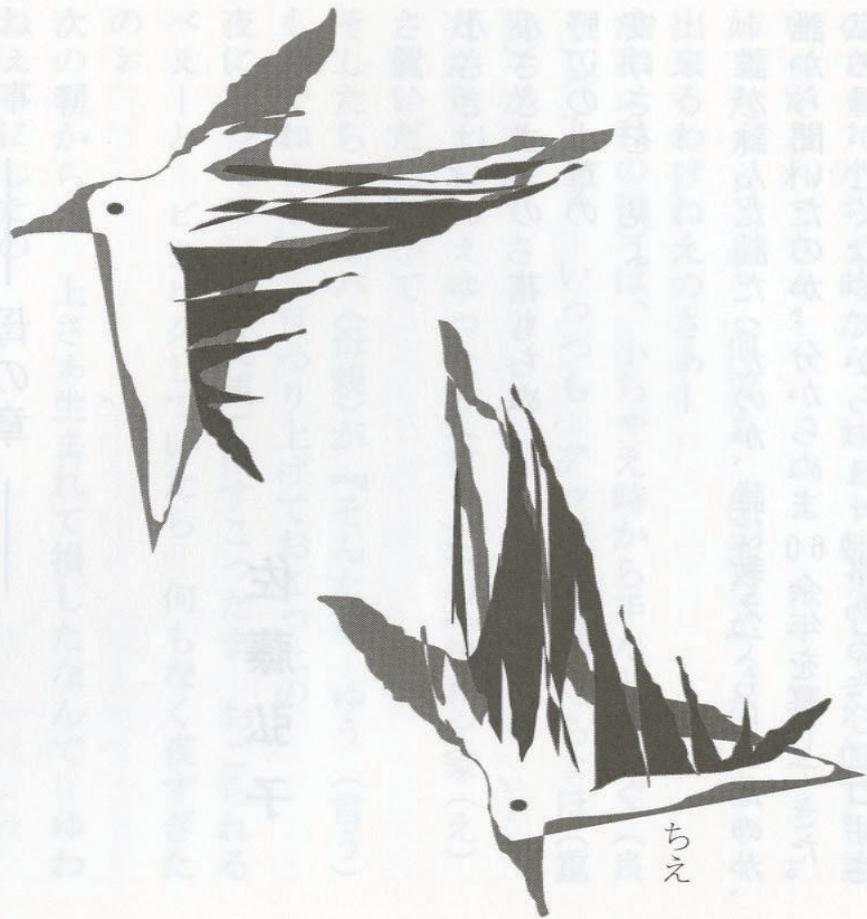
モクサレ家では早速挽き臼を挽きますが犬の糞が
出てきます。怒ったモクサレ爺さんも婆さんも臼を燃
やしてしまう。悲しんだマメオン爺いと婆さまは臼を燃
やした灰を丁寧を集めて持ち帰る。

悲しみに暮れているある日の事、ガンが空を飛んで

いるのを眺めて花さか爺さんの事を思い出す。灰を枯
れ木に蒔いて花が咲いた。そうだ、灰を蒔けば、ある
いは、ガンの目に入るかもしれない。蒔いてみたらど
うだろうかと考える。思ったらすぐ実行する。案の定、
ガンの目に入り、ガンの鳥を捕らえる事が出来た。近
所の人達を呼んで、ガン汁鍋になった。モクサレ家の
婆さまは、自分も皆にガンの鍋汁を振る舞いたいと思
う。少し残っている灰まで、根こそぎ持って行ってし
まう。しかし、最後はとんでもない事が起ってしまう。
灰がモクサレ爺様夫婦の目にまで入り、間違つて爺様
は高い所からすべり落ちてしまう。目が見えない婆様
は爺様をガン汁鍋にしてしまう。それを近所の皆もい
つしよになって食べてしまうのだ。何という結末であ
ろうか。

隣りの家の良い物を取り返そうとする行為、良い事
は真似したい人間の欲望が『がんとり』の中で表現さ
れている。モクサレ婆様が何を真似ても隣の婆様のよ
うにならない悲しい心は、他人の物を、無料で自分の
物にする行為を注意している現代劇でもあった。ど
んどはれ

(2013年11月)



ちえ

☆千三忌・駄句を詠む (2019年10月24日)

千三と小原麗子の三十年

千三忌平和をのぞむ強い意志

ワラ燃やすけむりたたずみ白鳥来

山彦

セキさんも石段に腰掛けていし千三忌

沖縄のこと忘れて平和と思うなり

山脈のゆったりおだやか千三忌

ふくれ女

吾亦紅杜鵑草の彩意志の墓

田の白鳥羽を休める平和かな

次世代も歩みをつなぐ千三忌

柳女

父と母にも

青春時代があつた

—— 母の章 ——

佐藤弘子

小さきは

小さきままの 花もちぬ

野辺の小草の

安けさを 見よ

誰が詠んだ謡だったのか、誰に教えてもらったのか、誰から聞いたのか、分からぬま60余年を暮してきた。私の母が亡くなってからの日々、事あるたびに口ずさんでいる自分に「はっ」と気がつくのです。

もしかしたら、母に聞いた謡だったのか……と思った
りしたが、どうしても母とは結びつかないのです。
若い頃の母と何か関係があるのかなア……と思った
ら居ても立ってもいられず、母の実家へと向かつてい
る私がいきました。

母の生家では、母の長姉（あね）が婿を迎え、九十
六歳の今も（平成30年）元気で家を守っているの
です。

また、祖母も家娘（えむすめ）であり、三代婿取り
の家であつた。

伯母（長姉）に母の若い頃の様子と、父との結婚ま
での事を知りたいので伯母（長姉）が知っている限り、
何でもいいから、話しを聞きたい旨、話すと、「今頃
物忘れが多くなつてさあ」と言いながら昔の事とな
ると昨日あつたようにスラスラ話すのにびっくり、こ
の調子だと母の事 詳細に聞けそうなので、本題に入
る事にしました。

最初は私の方であれこれ質問していたが、私の質問
はそつちのけで伯母は80年も前の世界にひとつ飛び
し、話し始めたのです。

「おれえねえ 本当は上さ 生まれたく ねがったのさあ 小ちえ時から 姉えー姉えーって、何でも言いつがされてさあー

姉えだからって 何でも 出来るがったらさあー 出来るわけねえのさあー

津和（私の母）は、小ちやえ時から手んどおいぐ（良く）ってさあーいっつも アツパ（母親）にちよほ（重宝）がられてさあー

だから おれえゆったの（言った）の『津和を家（え）さ置いだら』って

そしたら アツパ（母親）が『そんな事 ゆう（言う）もんでねえー』 目つり上げておこったの

夜になってアンマ（父親）にすこったま おこられるべえーと ビクビクしていたら 何もなく夜すぎたのお

次の朝からは 上さあ生まれて損したなんて ゆわねえ事にしたの

おれえ（長姉）と三番目（三女）は手んどお悪くてねえ いっつも津和（私の母）に面倒見てもらったの『何がって？』 おれえとアツパは畑や田さ出て ま

ぐさ（秣）刈りしたの その頃 馬つこ二頭もいたからねえ ともかく 一人とも 身体ほろつて 稼いだのさあ そうゆうこつただから 津和（私の母）が家の事 めし支度や 針仕事、何でもやったのお

三番目（三女）ときたら、外さ出ていったら どこさふつとんで行ったものか、日が暮れるまで遊びほけて 家の仕事は ほとんどしたこと ねえのさあ だから津和が馬の世話までやったのさあ

アツパはいっつも言っただけえ 『津和はどこさ出して おしよすくねえ』って

14歳になったときだったかなあ

町さ稼ぐ（働く）さ行くと行って 家（え）出たの 稼ぎ先の たなどの（店殿）のかっちゃん（店の奥さん？）がいい人で 津和のこと うーんとめんけ（可愛）がって 何でも教えてけだったの 一、三回おれえもそこさ行ってみたけど いい暮すさせてもらっていてさあ 見たこともねえの食つたりしてさあ

それから 銭っこかんじよ（お金計算）するの覚えてさあ 大したもんだと 思ったねえー

そこで 嫁ごの話もあつたそうだけど 津和は金た

めて 家さ帰ってきたの

その頃 戦争が始まって 家の回りの男(あんにや)だつ みいーんな戦争さ引っぱられてねえ おなご(女と子)と、としより(年寄り)しか 残ってねえのさ

あ 畑や田かせぐ人いねぐなったから 家さ戻ってきたの

その年 おれえの婿取が決まったの その婿の実家の隣に 疎開して開墾している家に 男ばりいるけど その四番の息子 なんじよだべ(どうですか)と津和に話すがあったの 今(昭和十七年?) 満州だがなんだが あつつ(あちら)の方さ行っている兵隊だけでも と言う話だったので、アツパは『何も死にさ行く人に娘ける(あげる)わけにいかねえ』と言ったけど、津和は『行く』と返事して、七日目にさつさと茨城さ行つたのさあ

岩手から茨城まで行くのに 銭つこもかかったべし、まして汽車さ乗って行つたから、うーんと時間もかかったのさあ おれえには出来ねえこつたなあー それから一年たつたら ひよっこり 家さ帰って

きたのつす 津和が

びっくりしたなあー まん丸こかった顔が げっそり ぶかぶかの着物に

髪はのびっぱなし なんぬつ(何日)も ゆ(風呂)さ入ってないかっこ(姿)だった

『なぬあつた!』と聞いても『二、三日置いてけれ』と言うばかりだった。夜、アツパとしてぎりぎり聞いたのさあ そしたら『わらす(童子)亡くした 男のわらすだった』と言うので あっ これは 家おん出されてきたと思つた。

茨城のかつちゃん(姑)はハイカラで、自分の息子五人は お国のため役にたっている と 口癖のようにゆつていた人だと聞いていたから…

アツパ(母)にも『一人でも男の子いて お国に預ける気はないのですか?』と言つたとか アツパもこぼしてたこともあつたなあー

落ち着いてから 津和に話しを聞いた。

『わらすは茨城に置いてきた。ダナ殿(夫)に何て言つたらいいのか 申し訳ねえことしてしまった』

津和の気持ちちが落ち着くまで家で過ごしていた時

だった。どこから聞いたか、忘れたが、ダンナ殿（津和の夫）の隊が青森から出発するので、会えるのは今すかないと言うので、アッパに頼み、汽車賃二人分もらってなあ、おれえとおれえの子（生後十ヶ月）と津和で汽車に乗り、八戸まで行ったの。そしたら八戸には来ねえというから、まず青森さ行くことにしたの。そしたら『浅虫駅で降りろ！』と言われてねえ。誰が言ったのか解らねえけど、そこで三人降りたのさあ。

駅にはいっぺい（たくさん）人がいて、どこに兵隊さんいるか、見つけられなかったの。みんなして紙っこに名前書いて『滝沢の沢口兵隊さん、いねえすかあー』と叫んでいるの。

紙っこも、何も持ってなかったし、名前呼ぶのもおしよす（恥ずかしい）がったし、二人してあきらめて、帰ろうかと思つた時、津和が何も言わず、指っこさしていたの。

その先から、馬っこさ乗った、ダナ殿が、まっすぐ、おらだつ（私たち）三人立っている方さ来たの、馬っこから降りだの見て、おれえ、すぐ、おれえ子、

さし出したの

そしたら、ダナ殿は、わらすを抱いて、ほら、こうすて、私の胸の所で、ぎゅう、ぎゅう、と、何回もすてからさあ、わらすを津和に渡すたの、津和も、ダナ殿も、なんぬも（何も）しゃべらねえで（話さないで）、わらすの顔をじいーと見ているだけだったので、『早く何かしゃべれえ、しゃべれえ』とつつついたけど、三人は何もしゃべらなかつた、わらすも泣きもせず、ダナ殿の顔を、ニコニコしながら見ていたの、時間にして二〇〇三〇分位かなあ。

ダナ殿は、また馬にまたがり、敬礼したかと思うと、あとは、後ろも見ねえで、去つて行つたの。

おれええ一人で泣いていたの、おれえだげだよ、泣いていたの。

夜になつて、汽車が動かねえのに気づいて、さあ、『どうすんべえ』と話ししていたら、傍にいた女の人に声かけられたの。

『赤ん坊いるのに野宿はわがねえんだよ、良かったら、家さ来たつせ』て

ついつて行つたら、浅虫旅館だったの、その女の

人の部屋に泊めてもらったんだけど 帰りは なんじよにして(どうして) 帰って来たか 忘れた!

そうゆうことあってから数日後、津和はまた茨城へ戻って行ったの あとから解った事だけど ダナ殿が津和に言ったときあ 『必ず生きて帰るから 待っていてくれ!』

きつと津和は一人になった時 泣いたんだべえうれしくて泣いたのさあ 愚痴は零(こぼす)さねえ我慢強いし 親やおれに心配かけまいとする妹だからな

戦争終わったたら 本当にダナ殿は 生きて帰ってきてねえ 電話の前で 津和が泣いていたの分かったよ うれしがったのさあ

それから三年位したったかなあ 津和のお産に立ち会いに 茨城まで行ったの 遠かったなあ ともかく 遠い所だった よぐ 汽車に乗って 着いたもんだと 今思っても びっくりする所だった

なかなか生まれなくてさあ 三日位は苦しんでねえ

産婆もあきらめかけたとき 大っきな声で泣いた 元気な女の子生まれたの

それがあんたなのす!(私) 真っ赤になってギヤアギヤア泣くす 泣くから顔はしわくちやな 小猿っこみたいで 女の子なのに これではなあ: と思つたが ダナ殿が居たので 『女の子でも 元気でいいのが一番だつす』と言つたような気がするのさあ そんな元気な子に生まれて良かったと思つていたら 四く五年後、子どもがどうも結核にかかったようだから岩手に来ると言うので すぐ盛岡まで来たのす

ダナ殿に抱かれて来たあんだ(私)を見た時 びっくりしたのさあ

色っこは白く 身体はちいちゃくて もう駄目なのかなあ と思つたが よおしく顔見たら 目だけはガラガラとしていたので 『あつ、これは大丈夫!』と思つたの

すぐ病院に入り 治療のおかげで 日に日に良くなってきたので、安心したの覚えているなあー 津和もダナ殿も一生懸命看病したんだよ

盛岡に仕事場を移したダナ殿は休みにはいつつもバナナ買ってきてねえ

おらだつ(私達)ももらって喰ったのさあ 津和がアツパ(母)やアンマ(父)にも必ず持って来てけでさあ二人とも『ありがてえ ありがてえ』と言って 泣いてだったなあ

それからはあんた(私)も元気になり その後はもう一人女の子生まれ 津和も幸せだったと思うよ

あつ! そうだ 大事なこと思い出した

ダナ殿が戦場さ行くと行った時だったか、行ってだ時だったか 津和が手ぬぐい持ってきたのさあ 千人針だとかゆつて(言つて)なあ

何の事か解らないおれはさあ 解らないけど 針っこを通して 赤い糸を針のあだま(頭)さクルクルと巻いて 『これ何さ使うのだ?』と渡したら、津和に『あねえ(姉)はさ、ダンナ殿を戦争さやってねえから(行かせてないから)、訳解らねえこと言うんだなあ』と津和にしてはめずらしく声を荒げたなあー

大分経つてから 津和に『千人針できたかー』と聞いたら、『ヤメダ!』とゆう(言う)のつす。あの言

い方は、それ以上『きくな!』とゆっているようであ あとぬも さきぬも この話すは終わりあと 何しやべればいいんだっけ こんなもんでいいのすか

ああ、おれえ え娘(家娘)なんかにならねばいかつたなあ

妹たち(二女、三女)から亡くなるとは 思つてもいなかったからなあ この年(九十六歳)でも妹たちが生きていて 話つこできるの うんと楽しみにしてたのに 淋しいもんだよ

長い、長い話が終わった

途中から涙が出てきて、泣いてしまったら、伯母に『泣きてえのは おれだよ』と言われる

伯母の話を聞いてからは、母を思い出す日が多くなつてきているのです。

母の若かりし頃の姿が目には浮かんでくるのです。その時、その時の母の顔が浮かぶのです。そしてひとつひ

とつの動作まで浮かんでくるのです。

父や母と過ごした年月は短い日々でしたが、思い出をたくさん残してくれた二人に改めて感謝しています。

母の生家を後に、父と母、兄、姉の眠る墓に立ち寄る。墓の回りに名も知らぬ小さな花がたくさん咲いている。

そうだ、これだよ、これだよ

あの謡はやはり母が口ずさんでいた謡だったんだ。父が亡くなった時、母の心境だったんだと、今気づかされた娘です。

小さきは

小さきままの 花もちぬ

野辺の小草の
安けさを見よ



☆千三忌・駄句を詠む（2019年10月24日）

秋空にトンボもみな合掌せし千三忌

たむけるコスモスも穏やかなくらし広げてるよう

日米安保条約八十%の世論の

とおりでいいのか！いや見直し撤回

辺野古の埋め立て裁判自然は

誰のもの日本はどこをみてるのか おてて

日高見川や流れもよどむ千三忌

ニューギニヤ千三の声くぐもりおりぬ

八十路越へなほ千三の墓ぬかづきぬ 艸央

沖繩の記録続ける青年に夢

駄句を詠む小春日和の千三忌 ちえのみ

今、里山で暮らす

相川元美

早朝の畑に立つ。

ある時は草刈機を背負い。

ある日は野菜を収穫して。

汗が次々と身体中から滴り落ちる。

私は六十三歳の見習い農婦。

“滝のような汗”という表現は嘘じゃないんだと思ひ知る。今の私を、若い日の自分に見せたいと思う。身体を動かすことが嫌いで、お気楽な本を読む快樂にばかり耽っていた私だ。

二十年程前、林檎園の葉摘みのアルバイトに、ひとり親だった私と高校生の娘が誘ってもらったことがある。大きな脚立に上がるのは足が竦んだが、作業自体は軽いものだった。休憩を挟んで三時間も続けられただろうか。昼休みに入った時、何も口に出来ないほど疲れ果てた私を見て、園主・小平範男さんは絶句。あの時の驚きの顔を思い出すと、今でも可笑しくなる。あの程度のことでもギブアップする人がいるなんて、呆れ果てたことだろう。かえって迷惑をかけてしまった。

今、毎日のように田畑に出るようになったが、農作業をするにはまだまだ体力が足りない。

「無理をしなくていい」「先に休んで」という夫の後ろ姿を眺めては、つくづく身体を鍛えておくべきだったと悔やむ。それでも、少しずつ草刈機を背負う時間は増えてきたし、長い休憩は減ってきた。去年と比べれば体力は少し付いてきたようだ。我ながら進化したなあ、と思う。筋肉は幾つになっても鍛えられるというのは本当らしい。

こんな今年の猛暑の中、私を喜ばせてくれたのは、庭先や田畑で出会う動物たち。タヌキやキツネ、カモシカやニホンジカも目撃するが、身近に楽しませてくれたのは蛙やミミズ、蝶やカマキリなどの小さな生き物だ。観察していると、今まで知らなかった発見があつて面白かつた。

ところで、ここに暮らすと決めたのは、八年半前の東日本大震災が起きる数か月前のこと。あの三月十一日は、隣町から「ここへ」と荷物を少しずつ運んでいる途中だった。

運転席でひとり声も出ず、電線が大きく波打つ景色の中で、ただ大揺れに身を任せるしかなかった。余震の間を縫って此処に辿り着くと、すでにライフラインは途切れていた。が、山には水や薪があり、米や野菜の備蓄もあった。あの時、つくづく田舎は安心して暮らせる場所だと実感した。

私は、昭和三十九年六月に新潟地震に遭っている。児童のほとんどが校庭で遊んでいた昼休み。小学校三

年の私は給食を食べられず、教室に残されていた。

「校舎の外へ出なさい！」という先生の声で出口へ向かうと、地面が大きな口を開けて、開閉を繰り返していた。思い切つて飛び、校庭に出ると、あちこちから水が噴き出していた。必死に走った。その夜、遠くで燃え上がる石油タンクの赤々とした火を見た。

「タンクが爆発したら、遠くへ逃げなければならぬ」と言う周りの囁きを耳にしながら、野宿を経験した。給水車・救援物資の列に並んだり、インスタントレーメンを齧つたりした記憶もある。

今、千葉県内では、台風十五号により広範囲にライフラインが寸断されたまま、現時点ですでに十日が経過している。復旧の見込みはまだついていないという。この残暑にどれほどの我慢を強いられているだろうか。

台風被害を伝えるテレビでは、養鶏業を営む人がインタビューに答えて、「もともと儲かる仕事ではないので、資金をかけてまで再建するのは難しい。もう続けるのは無理だ。」と苦渋の表情を見せた。

第一次産業は高齢化し、手間の割に儲かる仕事ではない。物価の優等生と持ち上げられる卵のように、牛乳もしかり。毎年こうした自然災害によって、潰されていく農畜産・水産業に携わる人々を思うと暗澹たる気分になる。

それにしても、毎年このような大規模な自然災害が各地で起きてきているのはどうした訳だろう。この狂暴化は地球温暖化の影響だと指摘されている。そもそも食料自給率が低い日本で、生産地が次々と壊滅的な被害を受けていることは、どういう結果を招くことになるのか・・・。

食糧難の時代を知らなくとも、人が食べ物によって命を繋ぐのは自明のこと。他国に命の綱を預けるのか？隣国との友好関係はどうなっている？農業は環境保全の役目もしているんだぞ、と畑で悶々としている俄か農婦の私だ。

人の立ち入らない場所はどんどん荒れる。この里では、山菜が放射能汚染によって出荷停止となり、山の

入り口は高い雑草に覆われたままだ。裏山を歩くと、旬を過ぎて切り倒された竹株に足を取られ、あちこちで躓いてしまう。

景観が損なわれただけでなく、地域の食風景も変わった。春になると産直には様々な山菜が並び、それらを求めて客が集まったものだった。が今は、茸や蕨などの山菜が食卓に上がることはほとんどない。ここではひとつの食習慣が消えたに過ぎないけれど・・・。福島原発事故によって、人々は生活の場を失い、生業の場を失い、故郷を失った。この地の損失は、国全体の損失だということを何度も何度も認識するべきだと思う。

ところが先日、これだけ多方面・広範囲に甚大な被害を与えた東京電力の経営陣に、『無罪』という許し難い破廉恥な判決が出た。同じ責任を負うべき国は、全く省みることなく原子力政策を内外に推し進める一方だ。

このような理性のない出鱈目な政権が、何故こんな

にも長期政権なのか理解に苦しむ。

選挙権を持つ十八才は、いったいどう考えているのだろうか？

「国は助けてくれない」「備えあれば憂いなし」ということを肝に銘じて、自助・共助の努力をするしかないのだろうか……。ならばせめて家族のために畑を耕し、折々に野菜を届けるしかない、と気合を入れ直す。

ところが、葉に穴が開いている、虫がいるのは嫌だという娘たち。農薬で虫が寄り付かないより、虫の安全保障付だと言っても納得しない。食べる物が無くなれば何だつて食べるはずだ。そのうち穴あき野菜の価値を思い知るだろう。当たり前前の食料、真つ当な食糧生産をそっちのけにして、遺伝子組換え、ゲノム編集と気味の悪い食品が流通する昨今なのだから。

自ら育てた野菜は安心できる。

毎度食卓で、「美味しいねえ！」と言う私に、夫は「もうわかったから。」と苦笑する。そんな彼は、私が台所に立つと必ず、「何をすればいい？」と横に立

つ。彼は女系家族で育った長男だが、全く自然に家事を分担する。分担というより率先と言った方がいいかもしれない。気づかないうちに作業着や食器を洗っていることも多い。以前、どうしても自然に動けるのか聞いたことがある。答えは単純明快だった。

「家族が多くて、貧しかったから皆で働くのが当たり前。男も女もないよ。」

その時、同い歳の夫が言う“貧しさ”の意味がピンとこなかった。が、今は分かる。土を耕し自給自足する事は、本来豊かなことなのだが、お金でモノを買うことが豊かなことのように思い過ごしてきた私たち。

物心ついた頃には、家庭内にはテレビ・冷蔵庫・洗濯機が揃っていて、さらに“簡単・便利に”と電化製品が次々と現れた。今も家電は日々更新を続けている。これらは、電気が切れれば役にも立たず、廃棄処理にも困るモノなのだ。

「土から遠ざかれば遠ざかるほど、きれいな服をま」といえばまとうほど、人間は上等になったような錯覚に

陥る」と書いた林檎園主・小平範男さんの鋭い言葉を
思い出す。

限界集落に近いこの地域に、農業をしたいという若
者が移り住んでくれないかなあ、と願う。

労働に応じた正当な農業収入の保障さえあれば、多
様な生き物が存在する自然環境は、子育てにも最適な
場所だ。

そういえば、広い林檎園の中で、小平さんの幼い二
人のお嬢さんがニコニコと駆け回っていた姿もあり
ありと思いい出される。

そんなこんなをつらつらと思い、若き日の怠惰な
日々を省みながら、今日も長靴を履く私。

この自然の恩恵に感謝しながら、できるところまで、
ゆつくり今の暮らしを営んでいきたいと思っている。



☆千三忌・駄句を詠む（2019年10月24日）

敗戦を廢戦と書く母のメモ

引き金の引く手を拭いて握手せよ ひで爺

秋津道千三忌墓参白鳥もいる

東雲のジョギングの人秋マラソン

冬支度庭木を伐って終活も

愛犬と夫と私と七十代

原発マネー二十億円は電気料

東京五輪放射能吸うから北海道へ

麗子さんイラク戦争反対鳩持って

グレタさん私たちにないのは勇氣です

犬好き人

母のカレー

高橋つか子

暑さがやわらいだ九月の半ばに、野菜を栽培している友だちが、たまねぎとじゃがいもを車に載せて持ってきた。

「いっぱい採れたから、食べですけでー」と言いながらビニールの大きい買い物袋二つに入れて、どっさり下ろした。

「こんなに頂いていいの？」

私は夏野菜のナス、ピーマン、トマトの苗を楽しむ程度に二、三本植えているだけだから喜んで頂いた。少し日に当ててからしまおうと、彼女に感謝しながらテラスに並べた。

夕食は頂いた野菜を使って作ろう。肉じゃがにしよるか、それともカレーかなあと考えているうちに、農作業で忙しく働いていた母のカレーを思い出した。

あざやかな黄色で、さっぱりとした味のカレー、一口大に切ったじゃがいも、にんじん、たまねぎ、その中に少し大きめに切った鶏肉が入っていた。おいしくて、私と弟は母をびっくりさせるほどお代わりをした。私が小学校の高学年ごろだから、もう六十数年はたっている。

家の前には畑があつて母は採れたての野菜で、おかずを作ってくれた。カレーの具も母が育てた野菜だ。鶏肉は父が飼育している鶏だった。父は戦争で体を傷め、力のいる農作業はしなかった。養鶏場で働いている知人の世話を受けて、鶏をひよこから育てていた。食卓には魚より、タマゴ、鶏肉の料理が多かった。

食油も、菜の花の種を収穫して、機械を持っている大きい農家に頼んでしぼっていた。台所には菜種油の入った一升（一・八リットル）瓶が五、六本あった。当時は大部分が自給自足で暮らしていた気がする。

小柄な母は休みなく働いていた。家の周りは田んぼ

が広がり、その一角に畑もあった。家の中に母がいない時は、田畑で仕事をしている。いつ休んでいるのだろうか、と思うくらいよく働いていた。

農繁期に、学校では田植え休みがあった。私と弟は苗運びをした。近所に住んでいる叔母さんたちも手伝ってくれたので、田植えははかどり、水を張った田んぼは早苗の明るい緑色に染まっていく。一番の楽しみは午後の小屋（おやつ）だった。少し広い土手に円く座って母の作ったおにぎり、がんづき、野菜の煮もの、みんなおいしく食べた。青空の下でにぎやかに食べた光景が心に残っている。母の手づくり料理は、みんなの心を和ませてくれていた。

私が嫁いで十年目に、母はがんで亡くなった。五十二歳、庭の黄色い菊の花が満開の十一月だった。

私は虫の知らせでもあったように、その年の正月に、あまり実家に顔を出していない夫と子どもたちを連れて出かけている。母は喜んで迎えてくれた。話も弾みこたつの上は手づくり料理がいっぱい並んだ。雑煮、煮豆、野菜のごま和え、たらのカレー煮、久しぶりに味わった。これが母の最後の料理だった。

元気に振る舞う母の姿に「病」が潜んでいたとは。早く気づいてあげればと、今でもそれがとても残念でならない。

今、私の子どもたち、息子、娘だが、それぞれ四十代になった。仕事の帰りが遅いので夕食は七十代後半の私が作っている。二週間に一回はカレーにしている。高校生の男孫（娘の長男）は、自転車通学なので帰って来ると、待ってましたとばかりに喜んで食べる。みんなカレーが好きなので「おいしいよ」のことはをもらうとうれしくなる。男孫が小さいときは甘口にしていたが、今では激辛に近い味になった。カレールウを選ぶのも子どもたちに頼んでいる。

今晚のカレーはスパイスを練り込んでいるルウを使わないで、母が作ったようにカレー粉で仕上げることにした。

早速、友だちから頂いたじゃがいも、たまねぎをいつもより大きめに切った。鶏肉の買い置きがなかったので豚肉にした。小麦粉にカレー粉を混ぜてフライパンで炒り、香りをつけた。台所にカレーの香ばしさが

広がる。具はサラダ油で炒めてから煮込んだ。軟らかくなったので香りをつけた粉を入れる。鍋の中は真っ黄色、カボチャのスープのような色に出来上がった。調味料は塩こししようと、とんかつソースを少し入れた。家族の感想は「スープのようだけど、これはおいしいよ！」家庭の味が一つ増えたようだ。

あざやかな黄色、母のカレーがよみがえった感じがした。さっぱりとしたカレーの味は懐かしい母の味である。



☆千三忌・駄句を詠む（2019年10月24日）

山の神のスズが流れて千三忌

野の花が乱れて咲いて千三忌

反戦を貫き通して人となる

泣いて笑って千三忌

麗ら舎に永遠に栄えあれ千三忌

甚古神

千三と沖縄つなぐ読書会

千三の墓前でにっこりススキのフクロウ

北の海渡って飛来した白い鳥

千三に学ぶみんなにあいさつ

窓の外北上川は何思う

鳥の海女

紡ぐには

高橋哲子

今晚、どうにかこうにかして六時半の交通安全協議会の理事会に三十分遅れで出席した。地域のスクールバスルートの質問など、悪しからず発言して帰宅する。早々にあり合せの夕食を摂る。夫は晩酌に種子島の黒糖焼酎の水割り二百ccを飲み干して一安心していた。それとなく総会資料を見ながら、今日持っていた古い雑記帳をめくっていたら、別ものを書き込んだ文字が最後のページにある。義父の介護日記らしい事が書かれている。二〇一五年一月一日のこと、あつ！そうだ。このことだと直感した。

本年度は、文集『別冊 おなぎ』の発行を継続する

話し合いで、みなさんの真意を確認することができた。なぜか新役として会計をまかせられることに決まった。通年の活動にプラスされた私分の日課としては、五月中頃から始まる田植えを終えての稗取りや、畑仕事の草取りと一連の流れの農作業をこなす中、新しく挑戦している。傾聴ボランティアのグループ仲間の活動も進んでいる。

二〇一〇年一〇月のある底冷えのする寒い朝八時ころ、義父は墓地公園側の県道の歩道スペースに花苗を植えて花壇作りをしようと車で家を出たが、まもなくその場で倒れた。通勤途中の近くの人たちが見つけてくれた。地元の謙行であることが分かって二人が声をかけた。「大丈夫かあ？」と声がけると「大丈夫だ」と返事はあったものの起き上がることはなかった。で、只ならぬ事と察してすぐに救急車を呼んでくれた、すぐそばの苺栽培法人の従業員の彼ら。その間、近くにある牛舎から毛布を持ち寄って身体を温めていてくれたという酪農家の奥さん。知らせを聞いてすぐに夫は車を走らせた。義父は救急車で運ばれようと

していた。歩道には苗箱がそのまま積まれた軽のバンが置き去りにしてあった。

私が出勤して間もなく会社に緊急の電話が入った。私は地元の後藤野工業団地内の工場でのパート労働なので、五分で家に戻り夫と一緒に中部病院に向かった。義父の症状は、くも膜下出血と診断されて午後からの手術となった。作業着のままの私は一度会社に顔を出し休暇届けを出して、入院準備の荷物を用意した。義父は二週間あまりの入院で無事家に帰ってこられたが、老人の一人暮らしは無理だとの医師のアドバイスにより、私たち夫婦は二百メートル先の義父の家に同居する。自分たちの寝具とその場の衣類だけ持ち込んでの家族生活は不安の始まりでもあった。いずれ、身体のマヒが起こり歩行困難になるであろうとも告げられていた。

冬に入り何センチか積もった雪の日、午前四時前に「ゴオーガガン」と音を立てて除雪車が走行している様だ。目が覚めるが外に出てみる気もなかった。私は朝食時に夫に言う。「あんなに、こつ早く除雪しなくてもいかべのに！うるさいったら！」。なんと夫で

はなくて義父の仕業わざだったと言うではないか。作業するのは困りものだが、元気なのであろうか。無事年越しをして新年を迎えることができた。

二〇一一年一月四日、早朝やはり寒い日、うめき声で呼ぶ義父は夫に言った。「おれ、なんだか、おがしいから、実家や大家の豊も呼んでける。家のことなど言っておく事あるがら」と。顔をこわばらせ右腕は曲げたまま左手で支えてかばっている様だ。私はベットの部屋に入り聞いてみる。「父さん、何した、痛いのか」。固まった身体の異変から救急車を呼ぶことに決めた。父の板間の部屋も冷たさが感じられる中、救急隊員が入ってくる。父に問いかけると返答はするが、頑として病院に行くことを承諾しないので手こずっている。診てもらって何でもなかったら、そのまま家に帰って来るべし、と言いついて私たちが。病院に行ったら、案の定、細い血管が切れていたのだった。一週間程で退院できた。前の時の看護師の彼女は「あと来なくてもいいからね」と励ましてくれるのであった。自分の気持ちはまだ頑丈なのだろうか。父は又も除雪機のエンジンを掛ける。が、作動することが

出来ないままで居た。夫は今後の危険性を思つて叱りつけてしまう。「父さんに頼まねがら。後は自分が除雪仕事もするから」と伝言して鍵を取り外してしまふほかなかつた。

二〇一一年三月一日のあの時、父と夫は家に居た。今までにない異常な地震にビックリしたものの、父は開け放つた窓や玄関から一步たりとも逃げようともしなかつたと後から聞いた。息子は、夜勤日のため駐車場で待機していた私の安否確認をしてくれて互いに安堵した。それから二年あまり、父は夫の見守りの中、日中は一人で散歩に出たりして、いつも通りの生活をしているつもりでいたが、徘徊にも似た様子や言動に辟易した夫は胃潰瘍を患つてしまふ。生活の不安を思うところもあり、私の定年退職に合わせて介護申請のために包括支援センターへ出向いた。近くの横川目介護施設のデイサービスを受けながら、在宅の日には私と父は日中仲良くお茶して話し込んでテレビを見ていたが、やはり私たち夫婦への風当たりは相当のものであつた。

二〇一五年一月一日、小雪くもり、凍てる大荒れか。

五時のアラームで起き、暖房を入れ灯りを付けてまとも眠る。六時半に目抜け魚の汁を作り、鯛のなまりの昆布巻き、柔らかすぎた菜の花のおひたしなどのおかずで朝食をとる。もちろん仏様に水と炊き上がりのご飯、神棚にも若水をあげ、父さんとお祈りして頂く。父は私より少し早く起きていたので水とお茶を出した。窓の外を見て「元朝参りの人も居ないじゃー」と独り言を言っていた。夕べは何やら物捜しをしていたらしく九時まで居た、ゴトゴトと。年賀状が配達されていた。マツ子さん、邦子さん、麗子さん、年賀状でも書きましたよ。父の年賀状には「朝日見ておだやかなりとみかん食う」と書かれていた。あとは余白のままである。まだこの頃は頑固でいた様だったが認知症はあきらかに見えてきたのである。

二〇一七年の半ば頃より身体の変化が起きていた。一年間で一〇キロの体重の減り方は何か異常ですよ、とケアマネさんに断言される。「父さん小柄なのに太っているから丁度いいんじゃない」と、私は屁理屈を言ってみるが、家庭医の柴田さんに連れて行く

ことにした。父の食欲不振も話し指導を受けようと思っていた。血液検査の結果は案の定、数値に異常があるとの説明で病気の疑いと手術をするとのこと。膵臓に腫瘍があり、ステント処置の方向であるとの説明であった。

病院の紹介状を持って指定日に県立中部病院の消化器内科を受診。九月二〇日の朝、二人がかりでなだめすかし車に乗った父を車椅子に乗り換えさせて大病院の玄関を通過する。異様な雰囲気を感じた父は「俺、何しに来たんだ、何にも悪いどこねじゃ」と言い張ってみるが、その後は神妙な顔つきで診察を待つ。やがて問診の時間がきて皆で診察室に入る。医師は手術の説明を本人に向けて言うが、書面を見ても分かる風もなく黙って顔を下げたままである。承諾のサインをする手前、私は父に向かって「食べれる様になるために内視鏡で処置するんだって、いがべ」「分かったっか、いがべ！」と強制的に否定なしに、うん、という言葉を書き込ませた。夫も黙ってその場をやり過ごしていた。次に改めて内臓のCTスキャン室に移動。終わった後、すぐ父に入院の旨が告げられ

次の日の手術となった。十日間の入院生活。手術の後の栄養管理された病院食は柔らかめなすべてがゼリー状のもの、とろみのある汁物。久々の食感なのかペロリと完食してしまうのであった。毎日きちんと食べた。会話もできた。私たちは本当に良かったなあと思っていた。「毎日来なくてもいいじゃ」と言うし、ベット側の部屋のトイレにも立って用を足した。

退院後は、いつも通りデイサービスに渋々でも行ってもらおう。昼食は気遣いされた刻み食であったり、エンシユアの栄養成分たっぷりの液体を摂取して栄養補充した。それは甘みあるフルーツ風味で父も好んで飲んでいった。一定した食事ができる様になったので、便通の方も心なしか改善された様にも見てとれた。

介護施設での敬老会では父が八十八歳の米寿お祝いのことばが書かれた色紙を頂いており、皆さんから喜んでもらっていた。皆の前に車椅子に座り並んだ父は、黙ってうつむいたまま静か。祝いの席の後ろから私は参観していた。そろそろ稲刈りの時期に入り、黙って三日間のショートステイを組み入れて父を送り出すのである。土日をはさんで何とか五日間で全部の

田んぼの稲刈りを終え、やれやれと安堵する。父が家に居る日は、黙ってベッド上でお茶、食事を済ませばすぐにも仮眠に入る。本当に訪問介護が始まって、心の休息をとることができて安心した。

素人のやる介護ぶりからみても、大分父が弱ってきてるなと判断がついていたものの、一言も痛みやつらさを訴えることもないままの老人の生活ぶりに、案外楽なもんだ、くらいに思つて淡々と家族暮らしをしてきた様に感じていたが、人間の身体は、そんな強健ではないのだ、と改めて感じた。やはり最期の時が来たのかなあ。実に三十六年間。二人共々、実父以上に農作業を通しての様々なくらいの違い、中傷のことば。父は夫の実兄なので尚更、舎弟扱いのキツイ言動を浴びせられていたのであった。介護を担って二年目で胃潰瘍になつた夫の辛苦、今では自慢話にしている。

退院してから一か月後、デイービスを受けながら、またも入院、再処置をするとのこと、今度は最終的に金属的なものでステント処置をするが、年齢的にもこれ以上の治療はしないとのことと私たちも同意しての五日間の入院。治療を受ける体力があるのかと不安

に思うが、父は黙ってなされるがままの状態であつた。術後はまた柔らかい食事をきちんと食べてくれた。しかし、体力が衰退していることは確実だったので。紙オムツを着けているにもかかわらず自分で排尿しに動き出してベッドにぶつかつて転倒してしまつた。病院から、父の身体の拘束を施しました、と告げられた。

退院の日、もう車椅子に座つたままでは移動できない父は、また介護施設の車でありがたく帰路に着くことができた。今後は訪問看護師を入れて容態を見守りながら、指導体制を取ることを受け入れなければならなくなつた。父には週一回の訪問看護師が来て、やたらに皆の目に曝されることになる。血圧測定から始まり、排尿の処理やら、眠くても受け答えをしなければならなかつた。認知症の様な態度も出るが、なんだかんだと言いながらも三人で笑つてお茶を飲んだり、家で育つた甘い柿も二口三口食べていたのだつた。もう腕の筋力も衰えていたが、身体が痛いとか頭がどうのこうのと辛さを訴えることもなかつた。一度だけ起こしたときに腰や背中をさすつて「ここ痛ぐねのがー」

と聞くと「うんだ」と返答したものの、辛抱強い頑固なほどの男気か。六年前の術後の脳のCT画像を見ても、脳の委縮の度合いも年相応である風で海馬の所の云々も年塩梅であろう言葉を脳神経外科の医師から告げられていた。安泰な生活をして、よく食べる様にと言う。父もまた老後生活がこんなもんであろうくらいに思っていたのではなかったか。

認知症も進んでいた。もう要介護四の査定。日常が異変し始めた。ケアマネさんが言うに、非常に身体の衰退が進んでいる、車椅子も首の支えのあるリクライニングのものに変更しないといけなくなっている、バイタルも低下している、いよいよ看取りに入る時期になった、と急に告げられた。週に二度の訪問介護と訪問診療も入り、父は和やかに医者を受け答えしているのだった。

二〇一七年十二月十六日（土）、今日も無理押しでデイサービスに行ってもらい、四時三十分頃、無事送迎車で帰宅したのである。すぐにも好きな玄米茶のとりみ入りのお茶を出す。短めのストローで二口ほど飲んでもらった。仮眠している間に私は夕食の支度にか

かっていたが、父の様子をのぞき見ると口元や掛け羽毛ふとんの衿元に、嘔吐の汚れが見て取れた。甘酸っぱい胃液の臭いがする。慌てて介護施設の横川目に電話を入れる。どうしたら良いのか対処法を聞きかっただのである。体勢を横寝にしたままちよつと様子を見ていようとの返答であった。また夕食前に水液が吐き出されていた。汚れ物を取り替えて、父の夕食は止めにして水分の補給だけにする。父に「今日はこのまま寝てしまふべな」と言い訳をしては、身体を休めてもらうしかなかった。夜中は何事もなかった様に眠ってくれていた。次の日の朝の目覚めは遅い時間である。排尿を取り替えて、とろみのお茶とエンシユアの栄養源で朝食とした。私も家事を済ませて九時過ぎ、いつものようにバイタル測定。体温は35℃、血圧を測るが数値が表示されず三度もエラー。なんだ、この血圧計こわれているのかな、と諦めた。が、何故か不安がよぎるのである。今日は日曜日なのでデイサービスに行かない日。訪問介護師は来るのだけれどと思うが、時間になっても彼らの現れる気配がない。夫にも事態を伝えるが「心配はなさそうだ」と一目見て言い切る。

たまり兼ねて施設に電話を入れる。出来れば早く来てほしい旨を伝える。父は静かに仮眠しているようだった。やつと十一時近くに今日の担当が来た。すぐに夕べからの父の異変と血圧が測れなくなつたことを報告する。彼もまた二度ほど計るが測定できなかったようだ。父は質問の受け答えのことばを弱々しく発しているものの、静かに眠り入っている様子だった。もう私は困惑して不安だったのだ。若い彼に向けて「今晚から、どうやって見たらいいんだろうか心配だ、不安になる」と言ってしまう。何でもいいから言つて相談してください、と言う訪問看護師のTさんに電話をかける。「早く来てほしい、大変だ」と伝言するが時間はたつ。彼女は義母の実家の甥の奥さん。私たちは三度ほどしか会つたことがなく、十七年前の母の葬儀以来。フリータイムの仕事だと言つて利便性を強調しているものの、そこは家庭の主婦、やつと昼頃家に来てくれる。彼女の顔を見て安心したのもつかの間、仕事としての接し方なのか、ベットの叔父に向かつて何やら語り出した。「おじさんは一生懸命働いたものなァー、おいしい米作りしたし、花っこ植えてみんなに喜

ばれたものだ、すごいんだねー」とひっきりなしに話しかけていた。そして私ら夫婦に対して伝える。もう、そろそろだと言いつけるのだった。訪問医に連絡を入れる。寝息は小さくなつていいる様だったが、素人の私は「まだ息してるじゃー」と言い張つてなんとか生かしたいと感じているものの、刻々と迫るもの。

「死装束」と言われるが、先ほど汚れた肌着も取り替えて黒いシャツに着替えたので、その様な格好でがまんしていただいた。実家の甥の奥さんのEが丹前下の木綿着を持参してくれたが必要なしとなる。親族の兄弟も顔を出してくれる。私は近くにいる長男のRを呼び出した。謙行祖父さんの生命の時間の無いことを告げる。看護師のTさんは父の生命の灯が消えるその時まで目を離すことなく看取っていてくれた。もう瞼は下がっていたが、父の鼻先に掌を当てる。息づかないの父に向かつて「謙行父さん、目を開けてー」と叫んでみると、聴こえたかのようにスーッと一瞬、目玉をむくように瞼が開いたのだ。夫も「けんこう、けんこう」と叫ぶ。この時ばかりは兄に向つて声をかけてみるが、もう反応はなかったようだ。ピクツと足元

ハル子さんのいと

小平玲子

大正十五（一九二六）年五月十五日生まれのハル子さんは平成二十九（二〇一七）年十一月四日、満九一歳で亡くなりました。私がハル子さんと暮らし始めたのは昭和六十二（一九八七）年六月、ハル子さん六一歳のときです。

いまから三十二年前の私が三三歳のとき、夫（三五歳）と義父（六七歳）、ハル子さんの三人家族の仲間入りをしました。当時の私は、周囲の友人や世間の人たちが言う「農家の嫁」「嫁姑問題」などという言葉に無意識に引っ張られていたと思います。夫は別にして、その人となりをほとんど知らない夫の両親との同

居に不安がなかったわけではありませんが、やってみなければ分からない、最初から「仲良くしなければならぬ」と考えず、自然と流れる方向にいくだけと、あまり深くは考えませんでした。始まってもないことをあれこれ憂うのはやめるという思考停止をしたのだと思います。ですから私の気持ちは世間一般の「嫁に来た」というよりは、四人の共同生活でりんご園を経営しているという感覚に近いものがありました。

ハル子さんからは最初に「仲良くしましょうね」と言われました。もちろん、そのことに異存はありませんでしたが、正直なところ複雑な思いがありました。スタート時点で置く言葉としてハードルが高いと感じていたのだと思います。憂いのない顔で「はい！」と応えるほどには若くはなく、十数年の会社員生活で集団の中の人間模様も見てきて経験していましたから「はい」と言うことは嘘をつくことだなあ・・・という感覚があったのだと思います。きっと私は曖昧な笑いでごまかしながら頷いていたはずですよ。

一町四反のりんご栽培を七年ほど続けた後、四〇歳の時に双子の女の子が生まれました。それまでは、りんご畑の作業を中心に大人四人でバリバリ働いていましたから、子どもが生まれたあとは生活が一変しました。私が畑に出られない時間が多くなり、子どもたちの面倒をみてもらうため春と秋の繁忙期には、北海道から私の母に来てもらいました。母が水沢に来ている間、家で一人過ごすことになった父、そして母には気苦労をかけたと思います。父はガンと診断され自宅療養中でしたが、その頃は日常生活には大きな支障がないように見えました。里帰り出産で札幌で生まれた娘たちでしたから、実家の母との関係も悪くはありませんでした。

当時、ハル子さんは

「私は子守はできないよ、預けられても困ると困惑したように言いました。」

子どもたちには愛情深く接してくれていましたが、ハル子さん自身が子育てを十分にできなかったことがトラウマになっていたのでないかと、のちのち思

い至ることになります。

ハル子さんは、初めての子であった女の子を四歳のときに事故で亡くしました。ハル子さんの実家に遊びに行っていたときのことだったそうです。そのことをハル子さんから直接聞いたことはありません。話したくないことだったろうか、それとも私から聞けば話してくれたらどうか、と後悔に似た思いを持つことがあります。

その後、夫が生まれ、その二年後に男の子が生まれましたが、その子も育たずに亡くなったそうです。結局、男の子ひとり育てることになります。その当時の農村の多くの嫁は農家の働き手として期待されていきましたから、朝早くから田畑に出て、戻っての朝食もそこそこに、また畑に出るといふ慌ただしい日常を送っていました。子どもの面倒を見るのはお姑さんの役目でした。思うように子どもをかまっていられなかった悔しさをハル子さんが話していたことがあります。

また、夫が話していたことで記憶に残っていることがあります。お姑さんが健在だったとき、毎日の食事

の準備などについてハル子さんは必ずお姑さんにお伺いを立てていたそうです。子どもだった夫にとっても、決まりきっていることをなぜ毎日聞くのかと情ないような苛立ちを覚えたようでした。ハル子さんが嫁いできた当初は舅、姑、夫の弟妹たち、そして、少し後には結婚したばかりの弟夫婦との同居生活だったそうです。様々な辛いことがあったようですが、そんな話をハル子さんから聞くようになったのは晩年のことです。私の夫でハル子さんの一人息子が病没して十年が過ぎ、義父が骨折して歩けなくなつたため介護施設に入所するようになった頃からです。ハル子さんと私は二人暮らしになりました。

その頃のハル子さんは認知症と診断されていました。その診断も自分で病院に行き、このごろは電話を受けても話をしていううちに名前を忘れてしまう、と医師に物忘れの不安を訴えて薬を処方してもらつていたのです。もちろん検査をした結果、処方された薬でしょうが、私はそのことを何か月も知らずにいました。腰が痛い、足が痛いというので一緒に病院に行つたことから分かつたのです。歳を取れば誰もが直面す

る物忘れくらいにしか思っていなかつた私はビックリ。すぐには事態を理解できず狐につままれた感じでした。そんなふうに分かることを心配し不安を持って、考えている人なのです。医師はそんなハル子さんを「神経質だからねえ」と言いました。

ハル子さんと二人暮らしになつてからの夕食時に、たまに、ゆつくりと世間話をするようになりました。それまでは義父も必ず一緒でしたから、気安くあれこれ話をする機会はありませんでした。世間話と言つても、いままでの自分の暮らし、いわゆる嫌だつたことや悔しかつたこと、怒りなど、どちらかというマイナスの感情が働く話が多かつたと思います。これまであまり口に出してこなかつたことなのだと感じました。それも当然のことです。夫の親、弟妹に関わることですから夫に不満を言つても、かえつて気まずくなるばかり、息子には愚痴を言う機会さえ多くなかつたかもしれない、と想像します。そう思つたとき、あー、ハル子さんの娘が生きていたなら、もつと感情豊かに暮らせていただろう、そして、きつと共感し味方になつてくれただろーと思ひました。

ある日、そういえばハル子さんの話はマイナスの感情ばかりだなあ、と気になり始めました。それまでは共感しながら聞いていたのですが、それだけではダメなのではないかと遅まきながら思い至りました。それで「いままでで楽しかったこと、懐かしい思い出は何？」と聞いたことがあります。「そうだねえ」と話し出したのは一氣に七十年以上も時間を遡った出来事でした。

昭和二十年の敗戦前のことになります。

「東京から実家に帰ってきて、卒業した小学校の校長先生に教員免許をもらって来たことを報告に行ったら、じゃあ明日から来てくれと言われたのね」と話し出しました。

「子どもたちと一緒に水路に田植えをしたんだよ」と本当に楽しそうに、昨日のことであるかのように話していました。私はそんな昔まで遡ってしまうんだと複雑な思いもしましたが、それよりもハル子さんの様子を見て嬉しくほっとしたのを覚えています。聞いて良かったと思いました。

ハル子さんは水沢の女学校（現・水沢一高）を卒業

した後、東京の学校（現・大妻女子大）の夜間部に行き、日中は大学の先生の家でお手伝いをし、夜に学校に通ったそうです。当時の水沢の女学校にはそんなルートがあつたそうです。東京の学校に行きたい人はいないかと問われたとき、ハル子さんは自ら手を挙げたそうです。それを聞いた私はハル子さんに「えっ、自分の意志で？」と聞き返したくらいです。忍従のハル子さんと思っていたのでとても意外だったのです。

ハル子さんは二十歳上の姉と二人姉妹で育ちました。家にはハル子さんより年上の姪を含め女ばかり五人の姪たちがいました。のちのち年上の姪が婿を迎え家を継ぎましたが、その後、甥が生まれたので跡を継いだ姪は分家したそうです。実家でのハル子さんは姪たちより立場が上のようなでした。晩年は温泉に誘われたりして姪たちと連れだって出かけることもありましたが、複雑な思いの姪たちもいたことでしょう。その当時の実家はハル子さんの姉が甥を生んだ後に亡くなり、ハル子さんの父が当主として家を守っていました。ハル子さんの父であり姪たちの祖父は出来た人

だつたらしく姪たちも女学校に行きましたが、戦況が厳しくなってきた時代にその年齢だった姪の二人は女学校には行けなかつたと聞きました。

ずっと後になってハル子さんが認知症と診断されていた頃、ハル子さんの実家関係の人から、遠慮がちに

「ハル子さんは大変でしょう？」

と聞かれたことがあります。私を思つての言葉のようでしたが、ちよつと意外でした。そうか、ハル子さんが東京に行く意思を持つていたこと、結婚してからのキツイ家で頑固なくらい変わらせずに自分を貫いてきたことが「大変でしょう？」という言葉で腑に落ちました。忍従という私の捉え方とは繋がらないハル子さんの姿でした。

じつと我慢して苦痛の時間を黙々とやり過ごすハル子さん、イヤだと思ふ人たちとは一線を画し、その人たちと同じ土俵に乗らなかつたハル子さん、ハル子さんは黙ること自分で自分を守ってきたのだなあ、と思わされました。私もハル子さんと同じ経験を少しだけしましたから、この環境でよくぞ染まらずに長い間、自

分を保つてこられたものだと感嘆しました。きつと、そんな姿が他の人の目には「大変な人」「扱はずらい人」と映つたのだと思います。

私は考えの浅い、通り一遍の捉え方しかしてこなかつた自分を恥じました。一人の人として、誰でも長く（あるいは短くても）深い歴史があることを思い知らされました。そんなことは当たり前のことですが。

まだ確かな考えには至っていないのですが、戦前（あるいは、現在でもと言って差し支えないか）の忍従して家に仕える嫁という括りはやめて、ひとりひとりの女たちは、もつと感じ考えて日々を生きてきたのだと捉えなければ見落としてしまうことが多いと思ひました。彼女たちの思いを聞く人、汲み取って理解する人、伴走する人が傍にいたなら、より豊かな時間を持つことができただろうと思います。

小原麗子さんが係つてきた「春・一番の会」という、農家に嫁いだおなごたちの詩の会が数年前まででありました。「春・一番の会叢書」として九冊の詩集が出版され、先日の読書会でその詩集を読む機会に恵まれ

ました。小原麗子さんはまさに、それぞれの女たちの声を聞き、汲み取り、理解と共感を示してきた人なのだ。改めて実感しました。ハル子さんより少し下の世代の人たちから始まった詩の会です。嫁が自由に他所に出かけることが難しかった時代を経験してきた人たちが、自分を表現する場を得て著した詩集は、実に生き生きとして小気味良さすら感じました。

固い殻を柔らかく開き、誘う人がいたならハル子さんも、もつともつと豊かな時間を持つことができたはずだった、と悔しい思いを持つと同時に、今頃それに気づく自分を情けなく思いました。

〈追記〉

私の父は七十歳で亡くなりました。父が亡くなる前年に里帰り出産をし、双子の赤ん坊は父が産湯を使いました。りんごの作業が忙しくなる秋と春の一週間ずつ、孫守のため私の母に水沢に来てもらいました。父は娘たち

が一歳になった四ヵ月後の八月十六日に亡くなりました。

母は父が亡くなったあと十年ほど北海道でひとり暮らしを続けていましたが、認知症を発症したので水沢のグループホームに入所してもらいました。遠くで心配しているより、近くで顔を見せられる安心を選びました。水沢で八年暮らし五年前の八月十五日に八六歳で亡くなりました。



Susan Duggan

“Learning Ikebana.”

I have been learning ikebana for more than twenty years. That seems like a very long time to learn something, but learning ikebana is actually an endless process.

I went to my first ikebana lesson in 1992, the year after I came to Japan. At that time, I lived in Kuji. I had always been interested in flowers and flower-arranging and when a friend, who was taking ikebana lessons, asked me if I would like to join her, I felt interested. I could hardly speak any Japanese, but the teacher and the other students were very welcoming and I enjoyed the lessons, even though I didn't really know what I was doing at all. Ikebana is so different from western flower-arranging and, at first, I thought the shape of the arrangements was strange and there were not enough flowers.

The time of the course changed and I was sad that I had to give up because I worked on weekdays. I didn't do ikebana for about a year and even though I had only been going to the lessons for a few months, I missed it. However, I met the teacher by chance and she very kindly offered to give me, and then also a friend of mine, lessons at weekends. Little by little, I came to enjoy ikebana more and more. I had had a part-time job in a flower shop for a few years in my hometown in Wales in Britain and knew a bit about flowers, but there are many flowers in Japan which I had never seen before. My ikebana school is Sogetsu and the textbooks for the beginner's course are in English and Japanese so I could understand my teacher's explanations well. Understanding the text is only the first step though. Practically making the ikebana arrangement was difficult for me. I will always be grateful to that teacher for her kindness and Patience. She instigated an interest in ikebana which has developed into an important part of my life.

After a few years, I moved to Kitakami. I was busy and I didn't know about any ikebana lessons. After about two years, I mentioned to a friend how I had enjoyed ikebana and was surprised that she was taking ikebana lessons in my neighborhood. She introduced me to the teacher. I have been taking ikebana lessons there for many years ever since. Coincidentally, the ikebana school I learn in Kitakami is also Sogetsu, as in Kuji, although when I started ikebana, I didn't know anything about it, so I didn't mind what kind of ikebana I learned. I wanted to learn about Japanese culture, so probably, if I could have chosen, I would have selected a traditional kind of ikebana. I didn't know that Sogetsu has a reputation for being modern and progressive and, from its early days, was internationally influential. Now, I am glad I became a student of the Sogetsu school because I think it gives me the freedom and confidence to try unusual creations and develop as a student, or maybe even as a flower artist.

Over several years, I enjoyed progressing through the Sogetsu course, thanks to my great teacher. My job is language teaching and I know how it feels to teach students. I think that teaching an art, like ikebana, is challenging. There is a prescribed course of Sogetsu ikebana with rules and, even when a student is experienced enough to do creative freestyle ikebana, there are still perceptions about what is acceptable and what is not very good! It seems to me that the task of an ikebana teacher is to encourage a student's unique creative potential, while leading the student to realize what is good ikebana. It is said that a student really only begins to understand their subject if they have to teach it themselves. I found this was true when I was honoured to be asked to teach a few lessons of beginner level ikebana in English to students at Iwate University last year. Having to explain ikebana in English to absolute beginners and to help the students make their ikebana arrangements was a valuable learning experience for me. I realized how oblivious I had been when I first started taking

ikebana lessons so many years before. Also, explaining in English made ikebana seem completely different and looking at ikebana from the viewpoint of a complete novice was so interesting. In my mind, I found new and unexplored dimensions within the big topic of ikebana. Sometime in future, I will resume teaching ikebana again and I am looking forward to my own learning continuing in deeper, unknown ways.

I really enjoy my ikebana lessons. I forget my daily life and completely concentrate on trying to create something. This experience is very relaxing and rewarding. In the past few years, however, doing ikebana has changed for me. It is a very individual change and difficult to explain in words. I can even call it a transformation. I used to like ikebana and look forward to seeing and using nice flowers and pretty containers. I would consciously think about choosing which colours matched well together and sometimes, before even seeing the flowers which I

would use, I would mentally plan the effect I wished to create. I don't know exactly when the transformation took place, but it was sudden! Since about two years ago, I don't consciously plan what I am going to do. It is instinctive. It is as if when I pick up my flowers, they are telling me where to put them! I suppose this is the result of experience and truly trusting the creative process and I imagine it could happen to an artist of any genre. For me, it has made ikebana fascinating, even exciting, and recently my ikebana arrangements are certainly better than before.

An ikebana student learns for oneself, but also, I think, may fulfil a social duty as an artist to display work publicly. I am happy that, over the years as an ikebana student, I have been given various opportunities to display ikebana arrangements, including at some exhibitions. Knowing that the general public will see my ikebana is great motivation to do my best and I have learned a lot from the process of every ikebana

arrangement displayed. I exhibit ikebana with an awareness of representing Sogetsu and am also conscious that my name is partly katakana so people may notice that I am not Japanese. I try especially hard in case people scrutinize my ikebana to see if a foreigner can do ikebana well!

Ikebana has become an important part of my life. I am still learning so much from it.

I continue to develop my skills with every arrangement. I love to create beautiful works. Specifically, at the moment, I feel that I need to expand my botanical knowledge, especially of flowers and plants of Japan. Also, I would like to learn about collaborative ikebana, creating works together with other artists. That seems to have vast and fascinating potential. Overall, though, I feel gratitude. I am so glad that I was introduced to the wonderful world of ikebana and am very grateful to all the people who have helped and encouraged me.



生花を学ぶこと

ダガン スーザン

生花を20年以上学んでいます。それは長い年月のようですが、生花は終わりのない学びの道です。

1992年来日した翌年、初めて生花のお稽古に行きました。そのときは久慈に住んでいました。それまでも、お花やフラワーアレンジメントに関心がありましたから、生花を習っている友人が誘ってくれたとき、興味を持ちました。私は日本語をほとんど話せませんでした、先生そして生徒さんがあたたかく迎えてくれました。何をどうやっているのか全然わかりませんでした、お稽古を楽しむことができました。生花は西洋のフラワーアレンジメントととても違いますから、最

初は生花の形がおかしく、お花が足りないと思いました。

その後お稽古の時間が変わり、私は平日働いていましたから、生花を辞めなければならず、悲しかったです。生花を1年ぐらいしなかったです。ほんの数ヶ月お稽古に通っただけでしたが、寂しかったです。ところが、偶然先生にお会いし、私とその後友人にも、週末お稽古をして下さることになりました。少しずつ、生花がもっともっと楽しくなってきました。私の出身であるイギリス、ウェールズのお花屋さんで、何年かアルバイトをしていたことがありましたので、お花について少し知っていましたが、初めて見る日本のお花がたくさんありました。私が習っているのは、草月流で初心者向けのテキストは英語と日本語で書かれてありますから、先生の説明をよく理解できました。それでも、テキストを理解することは、最初の一步だけです。生花を実践で生けるのは私にとって難しかったです。親切に根気よく教えて下さった先生に、いつまでも感謝しています。先生が、生花に対する私の興味関心を起こして下さったおかげで、その後生花は私の人生の大切な一部になりました。

数年後、北上に引っ越しました。当初は忙しく過ごしていましたし、生花の教室について、知りませんでした。北上に住んでおよそ2年が過ぎ、友人に生花を楽しんで習っていたことを伝えると、驚いたことにその友人は私が住んでいたところの近所の生花教室に通っていました。先生を紹介してくれました。そのときから今まで何年もその先生の教室に通っています。偶然にも、北上で習っているのは、久慈で習っていた流派と同じ草月流です。それでも、習い始めの頃は生花について何も知りませんでしたから、どの流派でも構いませんでした。日本の文化を学びたかったので、もし自分で選択したら伝統的な生花の流派を選んだかもしれません。草月流が現代的で、進歩的な評判があり、そして早い時期から国際的に影響を与えていることを知りませんでした。今思うと、草月流の生徒になって本当によかったです。なぜなら、草月は独創的な創作に挑戦し、生徒だけでなくフラワーアーティストでさえ成長させてくれる自由と自信を与えてくれるからで

す。

数年、素晴らしい先生のお蔭で草月のカリキュラムを進んでいくことを楽しみました。私の仕事は、言語を教えることですから、生徒を指導する気持ちをわかっています。生花のような芸術を教えることは、挑戦だと思います。草月生花には、花型法に基づいた決まったカリキュラムがありますし、経験を重ねた生徒がフリースタイルで生ける場合でも、受け容れられるもの、好ましくないものの基準があります。生花の先生の役割は、生徒が持つ個性的な創造の素質を引き出し促しながら、よい生花とは何かを生徒に気づくよう導いていくことのように思います。学生は勉強している科目を自分で教えなければならない機会があると、初めて理解し始める、と言われていました。このことを私が実感したのは、光栄にも昨年、岩手大学の学生に初心者向けの生花を英語で指導したときです。初めて生花に接する学生に、英語で説明しお花を生ける手伝いをするのは、私にとってとても貴重な学びの経験になりました。大学生を見て、私自身がお稽古を習い始めた何年も前に、どれほど生花について知らなかったかと気づかされました。また、英語で説明をすると生花は全く違うもののように感じましたし、初心者の視点で生花をみるのはとても面白かったです。心のなかでは、生花という大きなテーマのなかで新たな、そしてまだ発見されていない広がりを見つけた気がします。将来的に生花をまた教え始めたいと思いますし、更に深くまだ知らない方向で学び続けていくのを楽しみにしています。

私は本当に生花のお稽古を楽しんでいます。日常を忘れ、何かを創造してみることに完全に集中しています。この経験はとてもリラックスでき、やり甲斐があります。しかしこの2、3年、生花をすることが変わりました。これは個人的な変化で、言葉で説明するのは難しいですが、変容と言ってもいいかもしれません。それまでは生花が好きで、綺麗なお花と素敵な花器を見て生いけるのが楽しみでした。意識的に色使い、色の取り合わせを考え、ときには使うお花を見る前に、頭の中で作りたい作品の効果を前もって計画していました。この変容

がいつ起こったか分かりませんが、突然やってきました！ 2年くらい前から、意識的にどのように生けるかを計画をしていません。それは直感的なものです。まるで目の前のお花を手にとると、お花がどこに生けるかを語りかけてくるようです。これまでの経験の積み重ねと、創造していくプロセスを心底信じている結果ではないかと思います。このような変容は、どんなジャンルのアーティストにも起こるのではないのでしょうか。私にとって、生花は魅力的で、ワクワクし、最近、私の生花は以前より確かによくなりました。

生花の生徒は自分のために学びますが、アーティストとして公共の場に作品を展示するのは、社会的な任務を果たすことでもあると思います。何年も生花を学ぶ生徒として、花展を含め作品を展示する機会を与えられ、とても幸せです。一般の方が私の生花を見るときを知ると、がんばって作品を創る大きな動機づけになります。これまではそれぞれの展示作品を創っていく過程のなかで、たくさん学びました。私は草月を代表していることを心に留めながら、生花を展示します。そして、私の名字がカタカナで書かれているので、観覧される方々は私が日本人でないと気づくかもしれない、と意識しています。外国人が、生花を上手く生けられるかよく注意して見るときに備え、特に一生懸命作品に向かいます。

生花は、私の人生の大切な一部になりました。今でもたくさん学んでいます。私は毎回生花をしながら、技術を磨き続けていきます。美しい作品を創るのが大好きです。今、具体的にはお花と植物に関して、特に日本のものについて知識を広げる必要性を感じています。また、他のアーティストと共に作品を創る共同作品についても学びたいです。共同作品には、とても大きく魅力的な可能性があるようです。総じて、私は感謝の気持ちでいっぱいです。生花の素晴らしい世界を紹介して頂きとても嬉しく、手助けをしてくれ、励ましてくれた方々にとっても感謝しています。

あとがき

▽令和元年も残すところ僅かとなりました。今年は災害の年だったように思います。わが家のシンボルだった樹齢五十年になる白木蓮も、台風19号で根こそぎ倒れ、幹を残し伐ってしまいました。毎年、大きな白い花を咲かせ、灯をともしてくれた花。花が終わるとすぐに芽を出し冬頃には蕾が大きくふくらんでいました。

十一月二十八日（木）、第三八三回麗ら舎読書会の例会。金ヶ崎永岡温泉夢の湯に一泊、参加者は九名でした。

研修会は「知らなかった、ぼくらの戦争」（アーサー・ビナード著）を読む、レポーターは相川元美さん、二時間以上でしたが熱心にみんな聞いていました。夕食後、別冊おなご36号の編集委員会。前向きな意見が沢山出ました。

翌朝、小春日和の快晴。心も身体もリフレッシュ、散会しました。

最近、「チエリー・イングラム―日本の桜を救った

イギリス人―」、著者阿部菜穂子、を読みました。イギリス人「桜守」の稀有な生涯を描いたノンフィクションです。

大英帝国の末期に活躍した園芸家、コリングウッド・イングラム。桜の魅力にとりつかれた彼が遠路訪れた日本で目にしたのは、明治以降の急速な近代化と画一的な「染井吉野」で、日本独自の多種多様な桜が消えようとする姿だった、と書かれています。

この本を読んで私の桜に対するイメージが変わりました。桜についての知識が浅薄だったと、つくづく思います。

貴様と俺とは 同期の桜

同じ兵学校の 庭に咲く

咲いた花なら 散るのは覚悟

みごと散りましょう 国のため

この軍歌の歌詞のごとく、戦争中は「桜のように散る」ことが美德とされた。

桜は古代から日本人にとって生産や生の象徴だっ

たのであり、満開の花に人々は生きる喜びや力強い生命力、再生の力を見ていた。ところが軍国主義の台頭とともに、咲いた花ではなく「散り際」に焦点があてられるようになった。

敷島の 大和心を 人間はば

朝日に匂ふ 山桜花

本居宣長が詠んだ和歌です。これは本来、朝日をうけて咲くヤマザクラの高貴な美しさを賛美したうたであり、生の象徴としての桜の花のイメージを詠んだものである。しかし、宣長のうたは「大和心」と「散る桜」のイメージを故意に結びつけて、まるで桜のように潔く散ることこそが大和心であるかのように宣伝され、国のため、天皇のために死ぬことを国民に鼓舞する道具に使われた。

昭和七年（一九三二年）生まれの私の青春は十五年戦争の時代でした。昭和二十年（一九四五年）、終戦の年に女学校（現中学校）に入学しました。その時の口頭試問で、「日本を代表する花は？」と質問され私

は即座に答えました。「桜です」と。「どうしてですか？」
「潔く散るからです」と。七十五年前のことですが鮮明におぼえています。

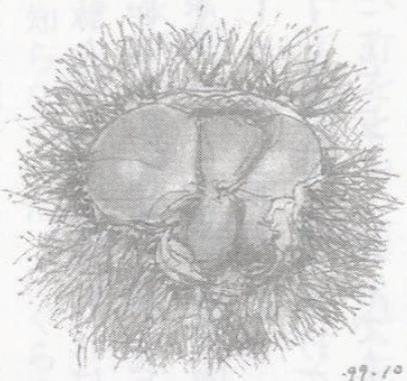
別冊おなご1号から35号までの表紙を描いてくれた兒玉智江さん、ほんとうにありがとうございました。原稿を寄せてくれた会員の皆さんありがとうございました。
（渡邊満子）

▽初めての編集作業。頼みの大先輩、ご近所の佐藤恵美さんは十二月中旬にピースボートの旅でオーストラリアに出発しました。果たして「おなご」を仕上げることが出来るのか、と不安の中での作業でしたが、パソコンに詳しい知り合いの手助けを受けながら、なんとか形になりました。

寄せられた原稿は、どれも興味深く、それぞれの思いが詰まっていると感じながらの作業でした。

今号の表紙絵とカットは主宰の小原麗子さんです。内容も装丁も良いものになりました、ありがとうございます。います、と自画自賛しています。
（小平玲子）

口... 日本... 1999.10.11



編集委員

- 主 宰……小原麗子
- 編集委員長……渡邊満子
- 編集委員……佐藤恵美
- 編集委員……田村和子
- 編集委員……小原麗子
- 編集委員……相川元美
- 編集委員……千葉ちた江
- 編集委員……高橋哲子(会計)
- 編集委員……小平玲子

(事務局)

別冊・おなご 36号
 発行日 二〇一九年十二月三十一日
 発行者 麗ら舎読書会
 発行所 北上市和賀町長沼 5-343-3
 TEL・FAX 0197-73-6673



